

県営圃場整備事業(昭和49年度)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告

町名

MATIYA

1975

長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

町谷遺跡緊急発掘調査報告

県 営 園 場 整 備 事 業

昭和49年度

1975

長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

序

飯島町の中心部飯島地区は、西は越百山、南駒ヶ岳にまで続く山地帯が約8kmにわたって広がり、山麓には中田切川と与田切川を主にして形成された扇状地と、その下方に続く三段の段丘面が天竜川に面する段丘崖まで3km余り続いている。北は中田切川によって駒ヶ根市に境し、南は与田切川によって七久保地区に境されている。北の中田切川、南の与田切川の間に形成された古い扇状地は、再びこれらの河川とその中間を流れる郷沢川太田ノ沢によって浸食が進められ、加えるに山地帯の隆起運動のために傾斜が急流となり開析が進んだ。そのため砂礫の流出が著しく、この土砂が山麓に堆積されて再び新しい扇状地が各地に形成されている。太田ノ沢と孫太沢とにはさまれた段丘上に田切中原遺跡があり、ここから南に田切町谷遺跡が広がっている。

昭和49年12月より田切春日平地籍の県営圃場整備事業が開始されることになり、この町谷遺跡の緊急発掘調査を実施することになった。幸いに南信土地改良事務所の御配意により予算もつき、団長に友野良一先生、調査員に伊藤修、和田武夫両氏をお願いして調査団を編成し、発掘に着手したわけであるが、調査団の先生方の献身的な御努力と高尾、春日平の皆様の御協力によって調査が無事終了出来ましたことは、まことに喜びにたえません。

今度の調査は、この広範囲に分布している遺跡の一部と考えられるが、縄文時代の住居址8軒、弥生時代の住居址2軒が検出され、縄文時代の住居址からは大形の完全な土器が数多く出土した。弥生時代の住居址は、今回が2回目であり、飯島町の先史、原始時代の流れの上からみて貴重な成果を上げることが出来ました。

ここに調査報告書の発刊にあたって南信土地改良事務所をはじめ、長野県教育委員会桐原指導主事、調査団の諸先生、高尾、春日平の皆様に衷心より謝意を表する次第であります。

昭和50年3月10日

飯島町教育委員長 北原健三

凡　　例

1. この調査は、圃場整備事業に伴う緊急発掘で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町教育委員会が実施した。
2. 本調査は、49年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆすることにした。
3. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

友野良一、森谷栄一、箕浦税夫、伊藤 修、和田武夫（順不同）

図版作製者

・遺構及び地形

友野良一、伊藤 修

・土器実測図

赤羽義洋、伊藤 修

・土器拓影

荻原 茂

・石器実測図

和田武夫、伊藤 修、赤羽義洋

・写真撮影

友野良一、伊藤 修、赤羽義洋

4. 土器復元は、和田武夫氏の手をわざらわした。

5. 本報告書の編集は、主として飯島町教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例	
目 次	(1)
挿図目次	(2)
図版目次	(3)
第Ⅰ章 環 境	(4)
第1節 位 置	(4)
第2節 地形・地質	(6)
第3節 歴史的環境	(6)
第Ⅱ章 発掘調査の経過	(8)
第1節 発掘調査に至るまで	(8)
第2節 調査日誌	(9)
第Ⅲ章 遺 構	(12)
第1節 住居址	(12)
第2節 柱穴址	(19)
第3節 土 壤	(21)
第Ⅳ章 遺 物	(22)
第1節 繩文時代の遺物	(22)
第2節 弥生時代の遺物	(27)
第Ⅴ章 町谷遺跡学習会	(29)
炉址について	(29)
柱穴址について	(30)
石器について	(31)
飯島の弥生時代について	(33)
第VI章 所 見	(35)
あ と が き	(68)

挿図目次

第1図 位 置 図 (1:150,000).....	(4)
第2図 地 形 図 (1:2,000).....	(5)
第3図 岩島・田切地区遺跡分布図 (1:40,000).....	(7)
第4図 遺構配置図 (1:400).....	(11)
第5図 第1号住居址 (1:60).....	(12)
第6図 第2号・3号住居址 (1:80).....	(13)
第7図 第4号住居址 (1:60).....	(14)
第8図 第5号住居址 (1:60).....	(15)
第9図 第6号住居址 (1:70).....	(16)
第10図 第7号住居址 (1:70).....	(16)
第11図 第8号住居址 (1:60).....	(17)
第12図 弥生1号住居址 (1:60).....	(18)
第13図 弥生2号住居址 (1:60).....	(19)
第14図 柱 穴 址 (1:60).....	(20)
第15図 第1号土壤 (1:40).....	(21)
第16図 第2号土壤 (1:40).....	(21)
第17図 繩文式土器 (1:6, 1:4, 1:3).....	(37)
第18図 繩文式土器 (1:6, 1:4).....	(38)
第19図 繩文式土器 (1:4, 1:6).....	(39)
第20図 繩文式土器 (1:3).....	(40)
第21図 繩文式土器 (1:3).....	(41)
第22図 繩文式土器 (1:3).....	(42)
第23図 繩文式土器 (1:3).....	(43)
第24図 繩文式土器 (1:3).....	(44)
第25図 吊手土器吊手部分 (1:2).....	(45)
第26図 繩文式土器、土製品 (1:2).....	(46)
第27図 弥生式土器 (1:3).....	(47)
第28図 繩文時代の石器 (1:4).....	(48)
第29図 繩文時代の石器 (1:4, 1:8).....	(49)
第30図 繩文時代・弥生時代の石器 (1:4, 1:3).....	(50)

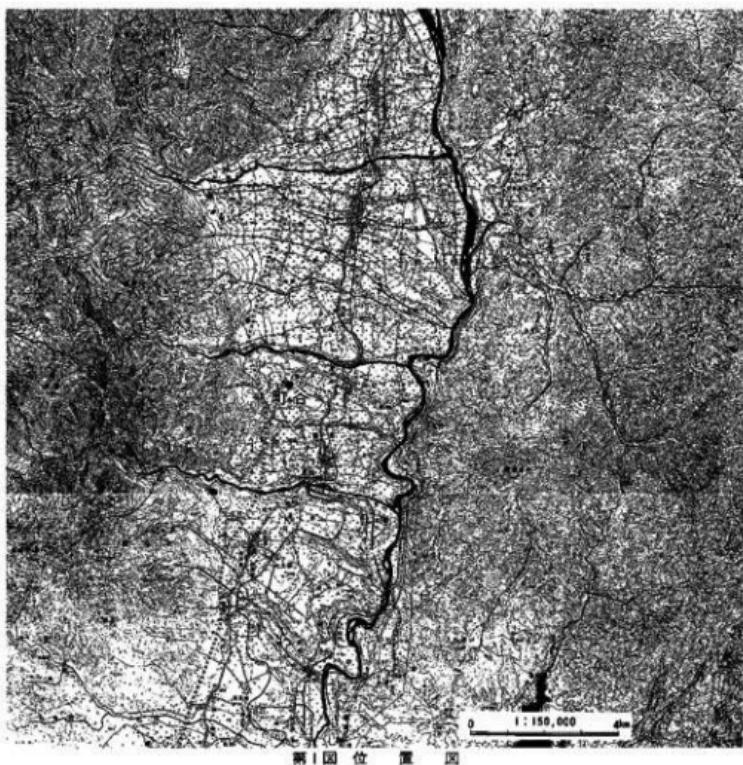
図版目次

図版第1	遺跡遠景（東より、西より）	(51)
図版第2	遺跡遠景、町谷堤	(52)
図版第3	住居址群（東地区、西地区）	(53)
図版第4	第1号・2号住居址	(54)
図版第5	第3号・4号住居址	(55)
図版第6	第5号・6号住居址	(56)
図版第7	第7号・8号住居址	(57)
図版第8	弥生1号・2号住居址	(58)
図版第9	柱穴址、記念撮影	(59)
図版第10	炉址（第2号、1号、3号、6号、4号、7号住居址）	(60)
図版第11	遺物出土状態	(61)
図版第12	出土土器（第2号、4号、5号、7号住居址出土）	(62)
図版第13	出土土器・土製品	(63)
図版第14	吊手土器吊手部分	(64)
図版第15	出土土器	(65)
図版第16	出土土器	(66)
図版第17	出土石器	(67)

第Ⅰ章 環 境

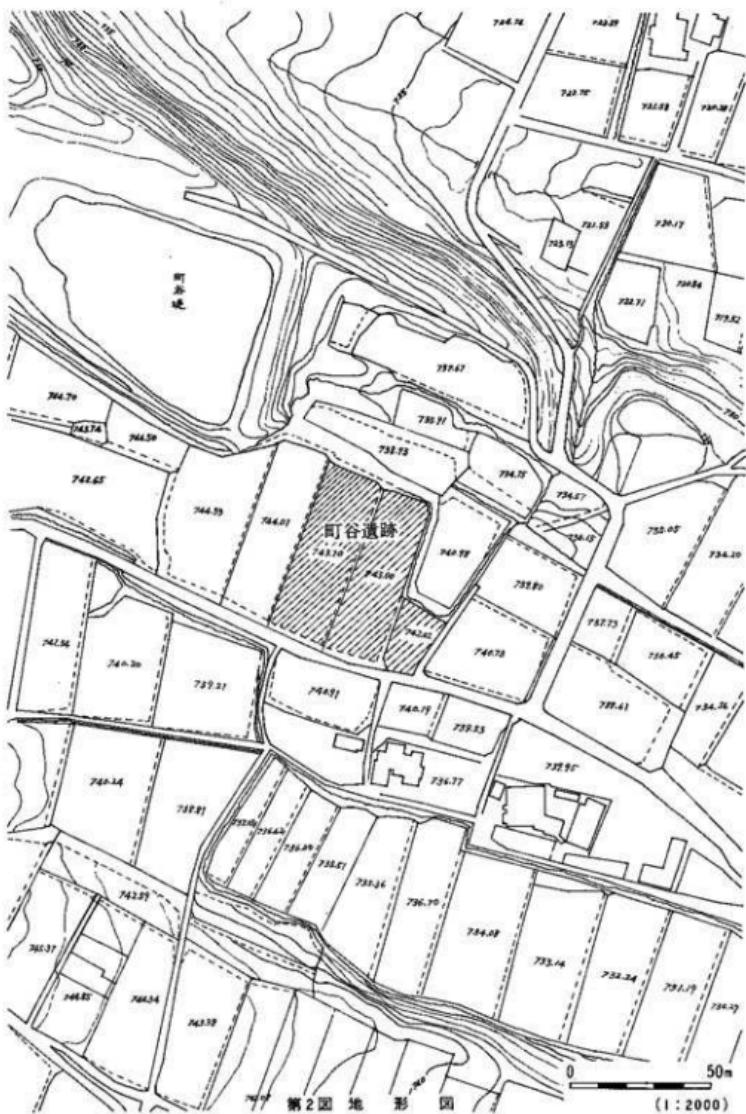
第1節 位 置

町谷遺跡は長野県上伊那郡飯島町大字田切 161 番地に所在する。遺跡は春日平部落の南端にあたり町部から北西へ約 2.2 km の所である。遺跡に至るには、飯田線田切駅で下車し、駅の南を東西に走る太田ノ沢にそって西へ 1.5 km ほど歩いた南側の二段目の段丘上である。



第1図 位 置 図

第一章 環 境



第2節 地形、地質

木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那谷は、一口に南北に細長い縱谷状地形といえる。この中央部を天竜川が南流し、天竜川に向かって西の木曾山脈、東の赤石山脈に源を発する中小河川が流れ込んでいる。これらの中河川は山麓にいくつもの扇状地を形成したが、その後の隆起運動により、これらの扇状地を自ら浸食していった。

飯島町は伊那谷のそれと同様、中田切川、与田切川、日向沢川等の中小河川の浸食、堆積作用により扇状地が発達しており、町谷遺跡は中田切川により形成された扇状地の扇頂部に位置している。遺跡の南側は山麓に始まる小規模な沢となっており、さらにその南は南東に向かって扇状地が広がっている。北側は太田ノ沢と呼ばれる巾約150mほどの沢となっており、この沢は国鉄田切駅の南側を通り天竜川近くまで続いている。太田ノ沢と遺跡の間は小規模な段丘となっており東へ行く程、その巾は広くなっている。この段丘を中原と呼んでいる。遺跡の東側は、約200mほど緩やかな傾斜が続き、遺跡の南北両側の沢と段丘によって舌状の台地となり切れている。遺跡の標高は、遺跡の中心で743mを計り、南側の沢との比高は7m、北側の段丘との比高は20mである。

遺構はローム層を掘り込んで造られており、ローム層上に黒褐色土層、黑色土層、耕作土層の順で堆積している。遺物は主として、黒褐色土層、黒褐色土層とローム層との境から出土した。

第3節 歴史的環境

飯島町では現在100箇所以上の遺跡が確認されている。これらの遺跡は、大部分が山麓の台地上、或いは河岸段丘の先端に集中しており、両者の中間である平坦部にはほとんど遺跡はみられない。更にこれらの遺跡は(1)春日平・高尾の山麓地区、(2)岩間の山麓地区、(3)本郷の段丘地区、(4)高遠原・七久保南部の山麓地区の4箇所に集中している。

町谷遺跡は(1)地区に属し、遺跡が最も密集している地域である。沢を隔てた南側には、高尾第1遺跡、北側には春日平中原遺跡、太田ノ沢遺跡などの大遺跡が並んでいる。時期的にみると、高尾第1遺跡は縄文時代中期、弥生後期、春日平中原遺跡は、縄文時代前期末～中期、太田ノ沢遺跡は縄文時代晚期の遺跡と考えられている。

尚、飯島、田切地区的遺跡は、次の通りである。

(伊藤 修)

第1章 環 境



第3図 鮎島・田切地区遺跡分布図

- ①うどん坂南 ②うどん坂Ⅱ ③うどん坂Ⅰ ④山 溝 ⑤八幡林 ⑥石上神社前
- ⑦庚申平 ⑧太田ノ沢春日平 ⑨久根平 ⑩岩間上山 ⑪滝ヶ原 ⑫宮の平
- ⑬鮎島天伯 ⑭岩間中原 ⑮大正新田 ⑯上の原 ⑰岩間城 ⑲岩間中通り
- ⑲岩間鈴の面 ⑳岩間赤坂 ㉑杓子ヶ森 ㉒高尾第3 ㉓高尾第2 ㉔高尾第1
- ㉕陣 場 ㉖郷 協 ㉗町 谷 ㉘春日平中原 ㉙太田ノ沢 ㉚久根平東
- ㉛山 の 神 ㉜孔 子 神 ㉝石曾根堂前 ㉞天 野 ㉟聖 德 寺 ㉞追 引
- ㉞南 刻 ㉞月 夜 平 ㉞平 沢 ㉞小 段 ㉞ト ャ ゴ ㉞唐 沢 城 坊

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営圃場整備事業飯島地区第6工区にある埋蔵文化財の調査として、町谷遺跡発掘調査を南信土地改良事務所から委託を受け行なった。

発掘調査に至る経過を簡略に記してみる。

昭和49年11月 南信土地改良事務所長から発掘調査協議の依頼がある。

昭和49年12月2日 長野県教育委員会桐原健指導主事米町。役場にて、南信土地改良事務所・農林課・飯島町教育委員会を交えて協議を行ない予算額を算出する。

南信土地改良事務所長と120万円で委託契約を締結する。

〔発掘調査団〕

團長 友野良一 日本考古学协会会员

調査員 伊藤 修 飯島町教育委員会

" 和田武夫 長野県考古学会会員

調査補助員 北原健三 飯島町文化財調査委員

" 山口 繁 "

" 宮下静男 "

" 片桐 修 "

" 桃沢匡行 "

整理作業 赤羽義洋 国学院大学学生

" 萩原 茂 笠輪町

〔調査事務局〕

事務局 織田正巳 飯島町教育長

" 森谷栄一 飯島町教育次長

" 笠浦税夫 飯島町教育委員会主事

" 片桐文子 "

(森谷、笠浦)

第2節 調査日誌

12月2日 本日より調査を開始する。午前八時半、現場にて簡単な結団式を行なう。畠の片付けができないため全員で野菜や石垣などを取り除く作業を行なう。昼より雨が強く降り始めたので午後の作業は中止する。

12月3日 畠の部分の調査を行なう。縄文時代中期、弥生時代後期の土器片がかなりの量出土した。弥生時代の生活面が明らかでないため、慎重に調査を進める。調査地区の北西より土器が集中して出土した。明日は、この地点の結論をだしたい。

12月4日 昨日の土器集中地点を除き他は調査地区を北へ移動する。方形のプランの落ち込みが検出された。弥生時代の住居址と考えられる。

最初に調査した所を第1号住居址とし、北側に第2号住居址・第3号住居址・弥生1号住居址とする。第1号住居址と第2号住居址との間にも住居址らしい落ち込みがあり、明日はこの遺構の確認を行なう予定。

12月5日 第1号住居址・第2号住居址の覆土を慎重に取り除く。別の班は、弥生1号住居址を北側に拡張し、プランの全体をだす。予想通りの隅丸方形の住居址となる。第1号住居址と第2号住居址の間の落ち込みも住居址となる。弥生2号住居址とする。

12月6日 この地区から縄文時代3軒、弥生時代2軒の合計5軒の住居址が検出された。全住居址の覆土を取り除き調査を行なう。寒さで、住居址の床面や壁が壊れる恐れがあるため、床面・壁は一歩手前で止めておく。

12月7日 全住居址の清掃を行なう。主要遺物はレベルをとり位置を平板におとす。昼までに住居址の写真を撮影してしまう。

遺跡は付近一帯に広がっていると思われる所以グリットによる分布調査を行なう。遺物は西側の



飯島町教育委員会見学

第II章 発掘調査の経過

水田より多量に検出されたため、明日より調査の中心を西側の水田へ移す。

12月8日 ブルトーザーで水田の耕作土を削ってもらう。西へ2枚目の水田からは遺物が多量に検出された。住居址が3~4軒あると思われる。

12月9日 住居址が次々と検出された。雨より第4号、第5号、第6号、第7号住居址とする。第4号住居址の覆土上層に礫が多くあるため、平板で実測を行ないその後取り除く。

12月10日 本日は雨のため、春日平公会所で土器の洗浄、注記作業を行なう。

12月11日 第4号住居址~第7号住居址までの覆土の調査を行なう。東側の水田より住居址が検出される。第8号住居址とする。第7号住居址、第8号住居址の南西より土壤が検出される。第1号土壤、第2号土壤とする。第4号住居址と第5号住居址の間より柱穴が検出される。東側を第1号柱穴址、西側を第2号柱穴址とする。

12月12日 写真撮影。

12月13日 本日で現場作業を終える。測量を行なう。

12月14日 遺物整理作業



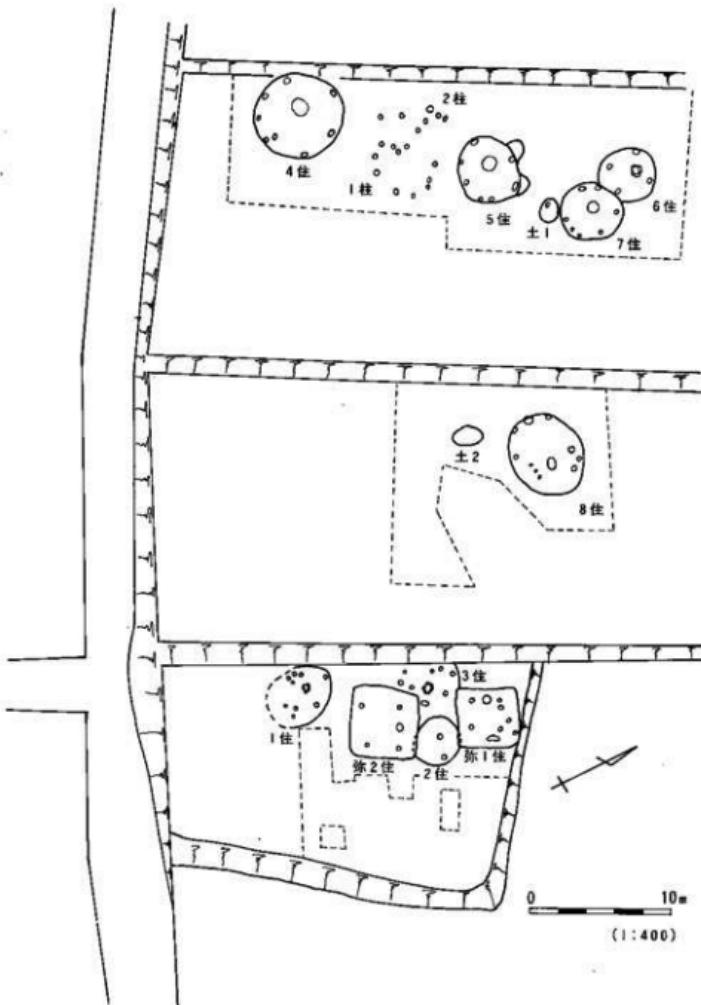
頑張っています



地層調査風景

〔参加者名簿〕

木下南、江端金次郎、北原芳子、星野千春、亀井とみ子、星野一雄、高橋国吉、山口重美、高坂糸代、内山香代子、堀内保雄、小林東一、内山四五六、林千春、中村芳子、北原ますみ、高坂加津代、山田鶴吉、高橋光、高坂文四郎、羽生ちどり、青木すみ子、唐沢きんよ、唐沢かつ子、高坂和子、小林里子、紫芝淳子、羽生しげ子、北島よし子



第4図 造構配置図

第III章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址（第5図、図版第4）

調査地区南東よ

り発見された楕円

形を呈する住居址

である。地形が南

側へ傾斜している

ためか、住居址の

南側では壁は確認

できなかった。床

はローム層を掘り

込んで造られてお

り、平坦で柔らか

い状態であった。

柱穴はP₁、P₂、P₄、

P₅が考えられるが、

P₁とP₂の間、P₂と

P₄の間にも存在し

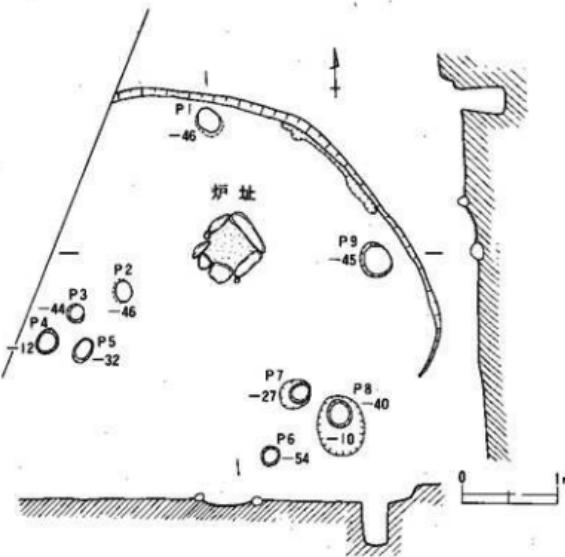
たのではないかと

思われる。炉は住

居址の中央やや北

寄りに造られており、石圓炉である。

遺物は、土器(第20図)、石器(第28図)が出土した。土器は、床面、覆土ともに比較的多量に出土しており、それらの大部分は縄文時代中期曾利期のものである。



第5図 第1号住居址 (1 : 60)

第2号住居址（第6図、図版第4）

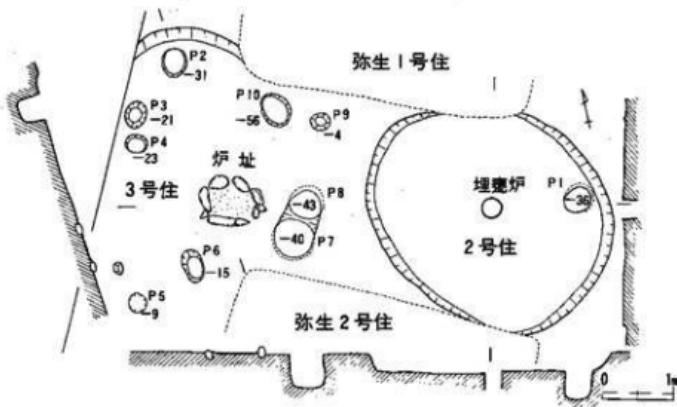
第1号住居址の北側、第3号住居址、弥生1号・2号住居址に挟まれた形で検出された。椭円形を呈し、長径3m・70cm、短径3mを計る。北側と南側は、弥生1号・2号住居址によってわずかに壊されている。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で柔らかい。柱穴は、Pが検出されたが4本主柱穴であったとも考えられる。炉はほぼ中央に窓を埋めて造っており、意図的に底部を壊している。

遺物は土器（第17図、第20図）、石器（第28図）が出土した。床面出土の土器は、縄文時代中期井戸尻期のものである。

第3号住居址（第6図、図版第5）

第2号住居址の西側より検出された。弥生1号・2号住居址に壊されており、プランは確定できなかった。壁は住居址の北側で一部残っているが、第1号住居址同様南側では存在しなかったと思われる。住居址の東側の限界は、恐らく第2号住居址のやや西側と考えられる。柱穴はP₁、P₂かP₃、P₅の3箇所が確認された。炉は石闇炉である。

遺物は、土器（第17図、第20図）、石器（第28図）が出土した。土器は大部分が縄文時代中期曾利期のものであり、中には第2号住居址の時期のものと思われる土器片（第20図）も混じっていた。

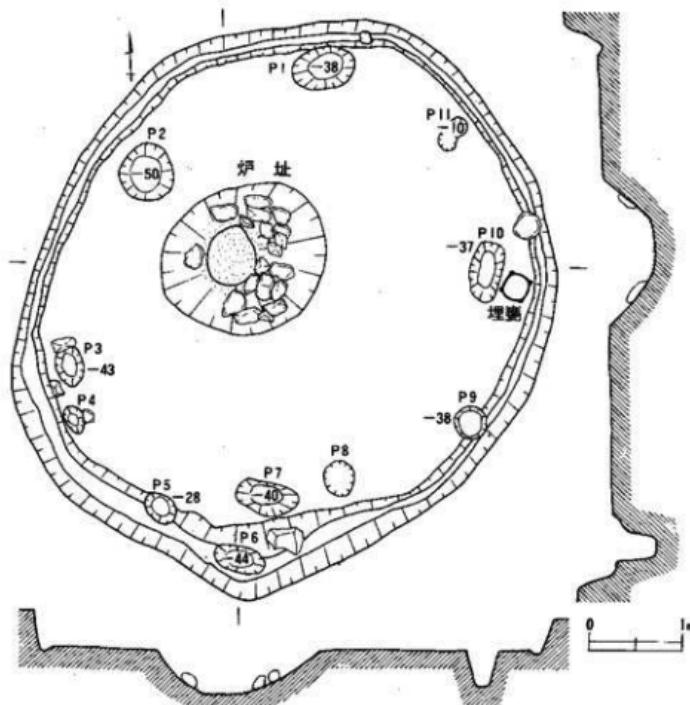


第6図 第2号・3号住居址 (1:80)

第4号住居址（第7図、図版第5）

調査地区の南西に位置し、楕円形を呈する住居址である。長径 6 m 10cm、短径 5 m 40cm を計り、検出された住居址の中で最大の規模を有する。床はローム層を掘り込んで造られており、壁の内側には周溝が巡らされている。床は比較的平坦であり堅く、東側には埋甌がみられる。柱穴は P₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₆、P₇、P₈、P₉、P₁₀ が考えられ、P₅ と P₆ の間の 1 m 70cm を除けば、後は 2 m 20~30cm 位の間隔で巡っている。炉は中央やや西北にあり、大形のものである。

遺物は、土器（第17図、第18図、第21図）、石器（第28図）が出土した。土器の出土量は多く、その大部分は縄文時代中期曾利期のものである。また覆土からは、土偶、吊り手土器の吊り手部分（第25図）が出土している。



第7図 第4号住居址 (1 : 60)

第5号住居址（第8図、図版第6）

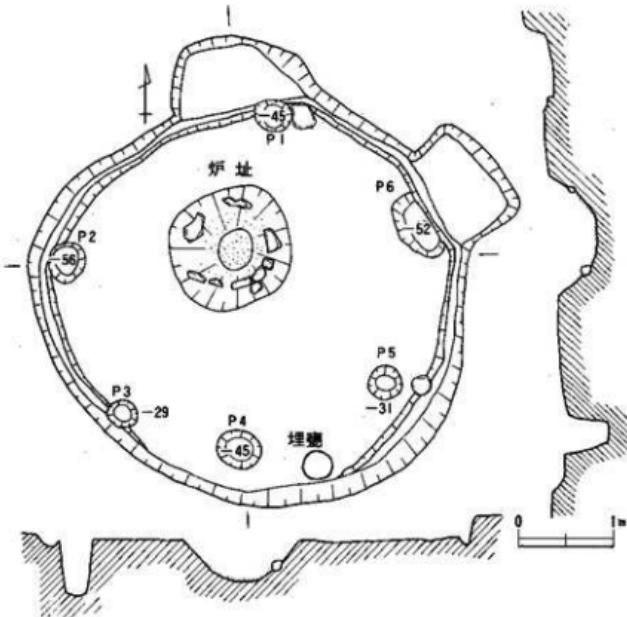
第4号

住居址の

北側に位
置する。円形に近
い住居址
である。直径約4
m 50cmを
計る。床はローム
層を掘り
込んで造
られてお
り、比較
的平坦で
堅い。壁
の内側には、周溝
が巡らさ

れているが、南側2m程の範囲ではみられない。住居址の北側、北東側には方形に近い張り出し部が造られており、どちらも床面からはあまり深くない。南南東には埋甕がみられる。柱穴は只一つが考えられる。炉は中央やや北西に位置している。

遺物は、土器（第18図、第22図）、石器（第28図）が出土し、土器は縄文時代中期曾利期のものである。



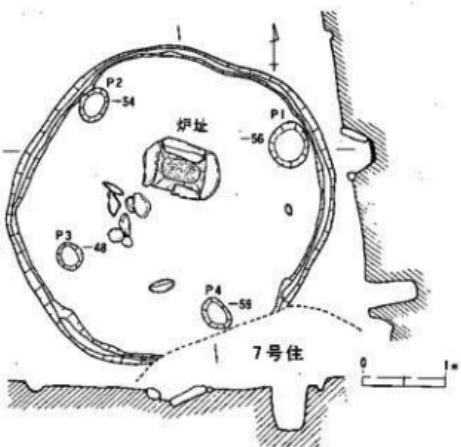
第8図 第5号住居址 (1:60)

第6号住居址（第9図、図版第6）

第5号住居址の北東に位置する円形の住居址で、南側は第7号住居址によって一部切られている。直径約3m 90cmを計る。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で軟弱であ

る。壁の内側には周溝が巡らされている。柱穴 P₁～P₄は、約 2 m 位の間隔で配されている。炉は中央や北側に位置し、石壠炉で中には焼石が堆積していた。炉の南西には数個の自然石が置かれていた。

遺物は、土器（第18図、第22図）、石器（第29図）が出土し、土器は縄文時代中期曾利期のものである。



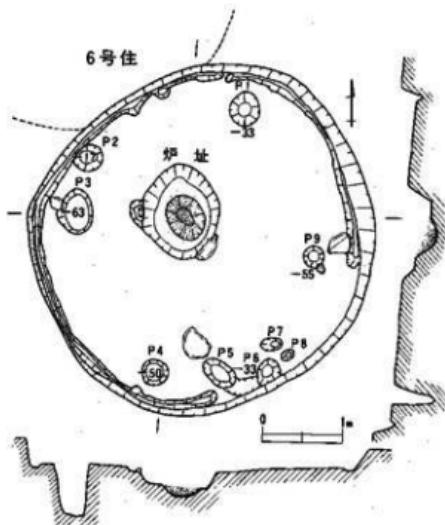
第9図 第6号住居址 (1 : 70)

第7号住居址

(第10図、図版第7)

第6号住居址の南側に位置する円形の住居址である。直径約 4 m 40 cm を計る。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で軟弱である。壁の内側には周溝が巡らされているが、南東側ではみられない。柱穴としては P₁、P₃、P₅、P₇ が考えられる。炉は中央や北側に位置し、炉石は抜き取られたように思われる。

遺物は、土器（第19図、第22図）、石器（第29図）が出土し、土器は縄文時代中期曾利期のものである。

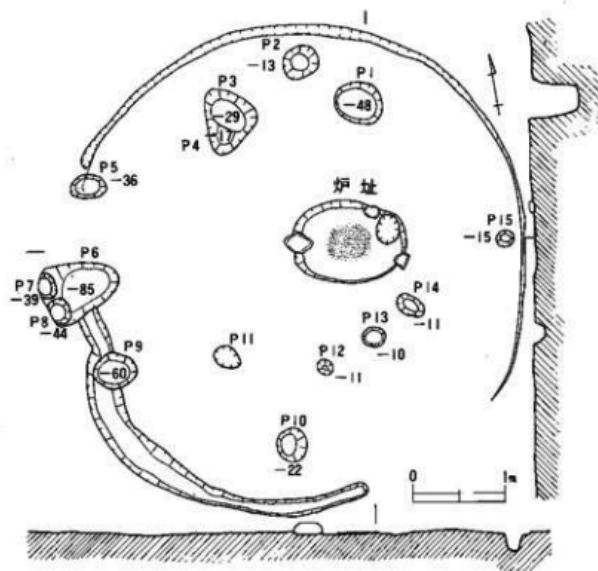


第10図 第7号住居址 (1 : 70)

第8号住居址（第11図、図版第7）

調査地区中央やや北側に位置する。水田の取り土の部分にあるため住居址の壁は壊されており、周溝によりプランが確認された。円形を呈し直径約5m=20cmを計る。床はローム層を掘り平坦で軟弱である。柱穴はP₁、P₂、P₃、P₄、P₅が考えられる。炉は中央やや東よりに位置しており、開田当時に壊され辛うじて炉の痕跡をとどめているにすぎない。炉の位置、周溝の切れ目からみて、西側が入口でないかと思われる。

遺物は、土器（第19図、第23図）、石器（第29図）が出土しており、土器は縄文時代中期曾利期のものである。



第11図 第8号住居址 (1:60)

弥生 1 号住居址 (第12図、図版第 8)

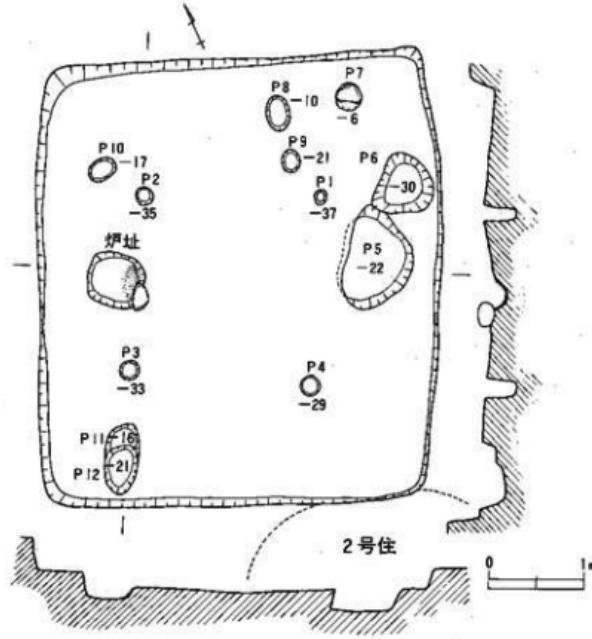
調査地区

東側に位置し、第 2・3 号住居址をわずか壊している。4 m × 80 cm × 4 m 30 cm の方形を呈する。床はローム層を掘り凹凸はあるが堅緻である。主柱穴は P₁、P₂、P₃、P₄ が考えられる。炉は西側の中央付近に位置し、ビ

ットと石がみられ焼土は東側に多い。住居址東壁寄りには、P₅、P₆ の大形のビットがみられ貯蔵穴とも考えられる。

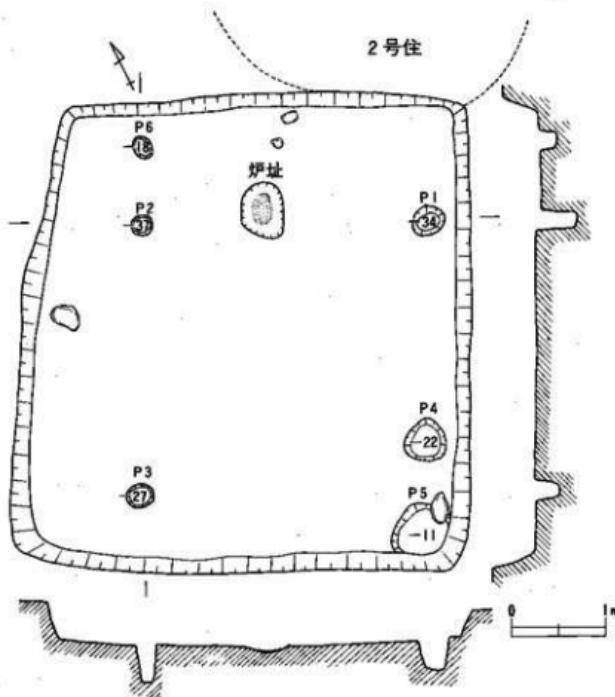
遺物は土器(第27図)、石器(第30図)1点が出土している。弥生時代後期と考えられる。

第12図 弥生 1 号住居址 (1 : 60)



弥生 2 号住居址 (第13図、図版第 8)

弥生 1 号住居址の南側に位置し、第 2 号住居址をわずかに壊している。方形を呈し、5 m 10 cm × 4 m 80 cm と第 1 号住居址より大形である。床はローム層を掘り平坦で堅緻である。主柱穴は、P₁、P₂、P₃、P₄ が考えられる。炉は北側中央付近に位置し、浅く掘られたビットの中央には焼土がみられる。焼土の北側には、埋葬炉に使用されたと思われる土器の一部が、



第13図 弥生2号住居址 (1 : 60)

残っていた。住居址の南側コーナーには比較的大きなピットがみられる。

遺物（第27図）は土器のみで、弥生時代後期のものである。

第2節 柱 穴 址

第1号柱穴址（第14図、図版第9）

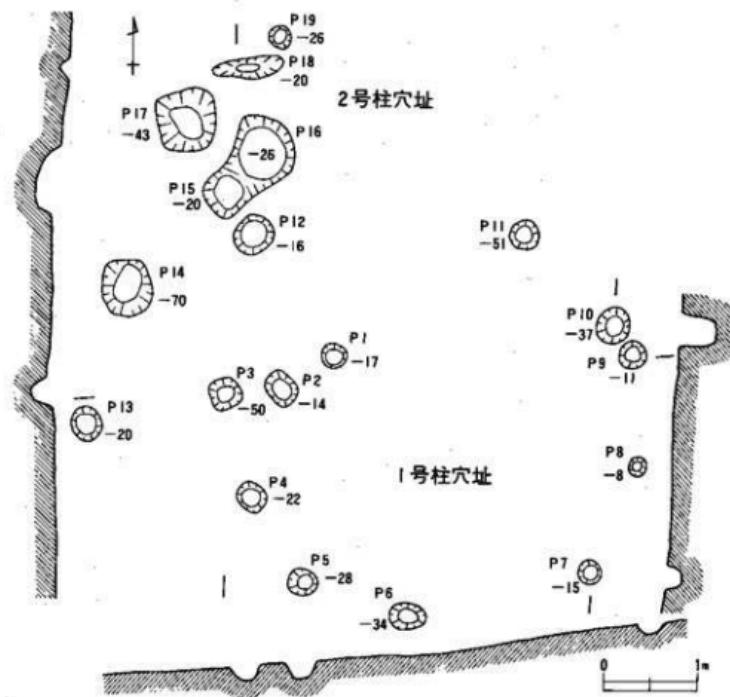
第4号住居址と第5号住居址の間に位置している。恐らくR₁～R₃までがこれに属すると思われる。開田により相当壊されたと考えられる。水田の地場上下より、20～30cm前後の礫が

多く見られたが遺構に関連あるかは確認できなかった。ピットの規模はほぼ同じ位である。ピットは $5\text{m} \times 10\text{cm} \times 4\text{m} = 50\text{cm}$ の範囲にはば滑円形に配されている。ローム層上には硬い面はみられず、焼土も検出されなかった。

遺物は、土器(第23図)、土製品(第26図)、石器(第29図)が出土している。土器は縄文時代中期終末のものであり、後期初頭と思われるものを含んでいる。

第2号柱穴址(第14図、図版第9)

第1号柱穴址の北西に位置している。第1号柱穴址と同様、開田により相当削られていると考えられる。水田の地場上下より20~30cm前後の礫が多くみられた。 P_3 ~ P_6 がこれに属す



第14図 柱 穴 址 (1:60)

ると思われる。ピットの深さ、大きさはさまざまであり規則性はみられない。

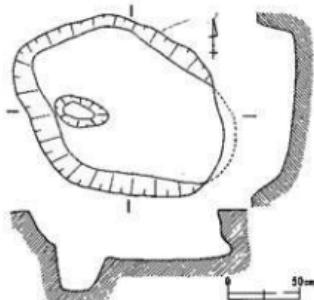
遺物は、土器(第19、第24図)、石器(第29図)があるがピット内からは出土しなかった。土器は縄文時代中期終末より後期初頭のものである。

第3節 土 壤

第1号土壤 (第15図)

第7号住居址の南西より検出され、 $1\text{m} \times 60\text{cm} \times 1\text{m} = 20\text{cm}$ の楕円形を呈する。底は平坦であり、東側は袋状となり西側にはピットがみられる。

遺物は、覆土中より土器(第19図)、石器(第29図)が出土している。

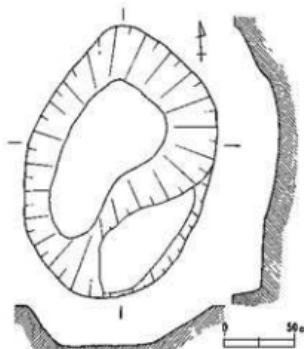


第15図 第1号土壤(1:40)

第2号土壤 (第16図)

第8号住居址の南西より検出され、 $1\text{m} \times 90\text{cm} \times 1\text{m} = 30\text{cm}$ の楕円形を呈する。壁はゆるやかな傾斜をもち、底は平坦である。南東側は底が一段高くなっているが、高低差はほとんどない。南東側の壁は、他の部分に比べると傾斜が急である。第1号土壤では、底の中央やや西側にピットがみられたが、第2号土壤ではみられない。

遺物は出土していない。(伊藤 修)



第16図 第2号土壤(1:40)

第IV章 遺物

第1節 繩文時代の遺物

第1号住居址

土器（第20図） 個体復元のできるものではなく、覆土・床面とも全て破片であった。（4）はソーメン状の粘土紐を格子目状に貼り付けた口縁部破片で、曾利I式。他は隆帯や粘土紐による構成をなすもので、（6）、（15）には渦巻き文を配し、（8）には馬蹄形の貼り付けがある。（5）、（7）は勝坂期のものである。床面から出土した土器は加曾利E式期のものである。

石器（第28図） 覆土から（1）～（3）が、床面から（4）、（5）が出土した。（4）は緑泥岩製で一部研磨されている。（5）は打製石斧としては大型のものである。

第2号住居址

土器（第17図、第20図） 第17図（1）はいわゆる平出第III類Aで、埋甕炉に用いられたものである。比較的薄手で黒褐色を呈し、雲母を含み焼成は良い。この炉付近からは（2）が出土し、床面からは（3）、（4）が出土した。（2）は波状口縁を持つ深鉢で、胴上半部は隆帯で井戸尻期特有の区画をなすが、その下には森内期の特徴を強く残す横帯区画文を配し、下半部には繩文施文がなされている。この様な構成をなすものは少ないが駒ヶ根市大城林31号住居址出土の土器と近似する⁽¹⁾。（3）は深鉢の口縁部破片で井戸尻期のものである。第20図（25、26、31、36、37）は平出第III類Aに比定される。（17、33）は、櫛形文がみられるが、諏訪地方のものより比較的薄手小形の傾向を示す。第2号住居址では、この様に平出第III類Aと井戸尻期の土器が併出している点が注目される。

石器（第28図） 覆土、床面合わせて19点と今回の調査の中では比較的多かった。（9）は石錐で、今回出土した唯一のものである。他に覆土から石錐第30図（27、28）、石錐（30）が出土している。石錐はチャート製である。

第3号住居址

土器（第17図、第20図） 覆土、床面とも出土量は少ない。第17図（5）は器形復元のでき

第1章 遺物

る唯一のもので床面から出土し、他は全て破片であった。曾利Ⅰ式期のもので、駒ヶ根市大城林遺跡33号住居址出土例に類似する⁽²⁾。

石器（第28図）（14）～（17）が出土しているが、打製石斧は皆無であった。（15、16）は横刃形石器であり、緑泥岩製の（14）は薄身の石匙であろうか。

第4号住居址

土器（第17図～第18図、第21図、第26図）埋甕を始め、復元できた土器6点の他、土偶、吊手土器など遺物は豊富である。第18図（1）は埋甕に使用されていたもので、4つの把手を持つ。飯島町尾越遺跡出土のものとよく類似する⁽³⁾。高さ47.5cm。第17図（6）、第18図（2）は炉址内より出土した。前者は現存高7.5cmの小形土器で、胴部に粘土紐を貼り付けているが、内側は焼土が詰まっていたため、赤化している。後者は器全面に浅い凹線を施したもので、頸部には4つの小形の把手を有する。第17図（7、8）、第18図（3）は何れも覆土から出土した。第21図（15～29）は床面及び炉址付近より出土している。若干新しいものも含まれるが、ほぼ曾利Ⅱ～Ⅲ式期に比定できよう。第25図（11～14）は吊手土器の吊手部分で、何れも覆土より出土した。

土製品（第26図）（6）は覆土より出土した土偶で、後へ張り出した臀部に沈線によってこの時期特有のハート形の文様が描かれ、両側面には同じく沈線によってワラビ手文を施し、前面にはワラビ手状の隆帯を垂下させている。この種の土偶は、飯島町尾越、中川村刈谷原を始め伊那谷や松本地方に類例が多い⁽⁴⁾。

石器（第28図）（18～24）が出土したが、床面からは1点も検出されなかった。5点の横刃形石器の他は、（19～21）の様に基部などを欠損するものが全てであった。（19）は大形の打製石斧で、（21）は緑泥岩製の石匙である。

第5号住居址

土器（第18図、第22図）第18図（4）は埋甕に使われていたもので、全面に隆帯による幾何学文様が展開する。部分的には、東北地方中期大木式を特徴づける「フ」の字状の鱗が退化したものと見られる文様があるが、これなどは飯島町山溝遺跡土壙群6出土例と類似する⁽⁵⁾。残存高38cmで、この種の土器としては珍しく一対の把手を持っていた様である。また胴下部には上半部の様な薄黒い汚れがなく、埋甕使用前に下半部は埋められて使われていた形跡がある。前述した4号住居址の埋甕も同様である。（5）は口縁部の下に断面角張った張り出

第IV章 遺物

しを持つ特異な器形の土器で、焼成は良い。駒ヶ根市富士山遺跡、松川町的場遺跡9号住居址出土の有孔鉢付土器に類似する器形かとも思われるが、下半部が欠損している為全体の器形は明確ではない。第22図(1、12、13)は強く内湾する口縁部破片である。總じて曾利II式期のものが多いが、中に東海地方咲焼式に類似するものが含まれる。⁽⁷⁾

石器（第28図）（25～28）が出土している。4号住居址同様、打製石斧、磨製石斧では基部及び先端部を欠くものが多い。(26)は綠泥岩製、他は硬砂岩製である。

第6号住居址

土器（第18図、第22図、第26図） 器形復元のできた第18図(6、7)を除いて他は小片のみであり、覆土、床面とも出土量は少なかった。(6)は、B₂上部のや、ずれた位置に立ったまま検出された胴部破片で、隆帯と凹線によって区画した中に満巻文を配している。(7)は、縄文地文の上に凹線によって縱長の区画を行なっているものである。覆土からは、第22図(19～21)が出土している。床面から出土している土器は、總じて曾利II～III式期のものである。尚、覆土より、第26図(5)の様な、鉢と思われる部分に上下の穿孔を持つ破片が出土している。

石器（第29図） 覆土からの出土は少なく、(1～4)が床面から出土している。(1)は乳棒状の石器で硬砂岩製、(4)は綠泥岩製の磨製石斧である。

第7号住居址

土器（第19図、第22図、第25図） 土器の出土量は覆土、床面とも少なくはなかった。器形復元のできたものは第19図(1)の1個体のみである。縦に条線を施し、胴部中央に2条の連弧文を巡らせている。第22図(22～28)は何れも覆土から出土したもので、(23、24、28)には2～4条の沈線が波状に巡っている。全体に飯田～東海地方との関連が考えられる土器が多い。⁽⁸⁾ 第25図(10)の吊手土器の吊手破片が1点覆土より出土している。

石器（第29図、第30図） 第29図(7)は綠泥岩製で、全面に敲打を行なったものであり、(8)は円形の礫の中央に凹みを持つ砂岩製の凹石である。第30図(31)は黒曜石製の小形のスクレーパーと思われる。

第8号住居址

土器（第19図、第23図） 水田造成時に削られている為、土器を始め、遺物の出土量は比

較的少なかった。第19図(2)の深鉢の胴部が器形復元のできる唯一のもので、床面から出土した。胎土には石英、長石等の砂粒を多く含み、焼成は悪い。墻帶で区画した中を沈線や竹管の押し引き文で埋める。頸部の馬蹄形の墻帶が特徴的である。岡谷市海戸遺跡¹⁰、南箕輪村北高根A遺跡¹¹、出土例に類似する。曾利II式土器である。第23図(1~4)の覆土出土の土器には若干時期的に新しいものが混入している。

石器(第29図、第30図) 開田時に覆土の大部分を削られており、出土は床面のみに限られた。第29図(9)は花崗岩製の凹石で、表面は極めて脆くなっている。第30図(29)の石鎌が1点床面から出土している。

第1号柱穴址

上器(第23図、第25図、第26図) 器形復元のできたものは1点もなく、全て破片であった。第23図(7、10、11)は、磨消繩文を施した口縁部破片で、(21~30)は同様の手法による胴部破片である。磨消帶が大きく上下に蛇行して器面を巡るものが大部分であろうと思われる。(8、12~14、16~20)は器全面に、沈線で縦の区画を行ない、その間に2条の結節繩文を垂下させている。(16)は弱い斜繩文を施す。頸部に沈線で横長の楕円区画を行なうもの(12)も見られる。口縁部は沈線による楕円区画と渦巻文を配するもの(14)、縦の区画が口縁部まで至るもの(8)がある。(12、14)の楕円及び渦巻文の沈線内には刺突が加えられている。(15)は小刻みに蛇行する浅い沈線を施し、一部に斜繩文施すの見られる波状口縁の破片で、前述のものとはやや異なる点がある。(8、14、15)を除いた、胴部に結節繩文を垂下させるこれら的一群は、図版第16の様な器形になるものと思われる。口縁には巾広の回線で馬蹄形の文様が連続して描かれる。(5、6)は刺突のある口縁部破片で、(33)は口縁に近い部分に刺突を加えている。これらの土器は総じて胎土、焼成とも悪いものが多く、(30)の様に薄手で焼きが良く、器面調整も丁寧なものは極めて少ない。前者の沈線は比較的浅く、繩文原体の節も大きめであるが、後者の沈線は深く、繊細な繩文が施されている。大部分は中期最終末期のものであるが、一部、後期初頭と思われる土器が混じっている。また、1号柱穴址から出土した土器は、磨消手法の用いられる一群と、沈線と結節繩文とで飾る一群との、およそ2大別ができる¹²。

第25図(1~5)、第26図(3)は何れも吊手土器の破片で、沈線の中に刺突をえたものが多い。第26図(4)は、蛇体と思われる装飾のある把手である。

土製品(第26図)(2)は径2.5cm、厚さ6~7mmの土製円板である。(1)の異形土製

第Ⅳ章 遺物

品は、10個近くの孔を穿ったもので、左上端には把手状のものが付いていたのかもしれない。外側の縁状の部分には逆「S」字状に浅い沈線が引かれ、中央の孔の多い部分には赤色塗彩されていた形跡がある。この土製品の持つ特殊な性格の一端が何えようが、果たして何であったのかは決め難く、今後の類例を持ちたい。

石器（第29図） 石皿の破片を利用した花崗岩製の凹石が1点（11）と、同じく花崗岩製の蝶の巣石が2点（12、13）出土している。

第2号柱穴址

土器（第19図、第24図、第25図） 第19図（3）は深鉢の胴部破片で、縄文地文の上に2本の深い沈線で「U」字状の文様を描き、波状沈線を垂下させたものである。（4）は胎土、焼成とも極めて粗悪で器厚1.2～1.5cmと厚い。口縁部には簡単な把手がみられ、その間を低い隆帯が巡っている。把手の下には同様に渦巻様の隆帯を配する。隆帯の片側及び中央には、中に刺突をもつ沈線が引かれている。尾越遺跡配石4付近の遺物の中に小形だが類似するものがある。¹⁶ また松戸市金楠台遺跡など関東地方にも類例をみる。¹⁷ 拓影（第24図）では磨消を行なう口縁部破片（11～13）、沈線で区画した中に縄文を施すもの（4、5、14）、沈線のみ描かれたもの（7、8、16）、沈線で縦に区画し、結節縄文を施すもの（17、18）、半肉彫或いは粘土紐を貼り付けた口縁部（1～3）など多彩な土器が出土している。総じて、中期末葉～後期初頭に至るものまで含んでいる。第25図（6～9）は何れも吊手土器の吊手部分の破片で、無文のもの、浅い沈線を施したもの、沈線内に刺突を行なったものがある。

石器（第29図） 打製石斧、磨製石斧、凹石があり、（14）の凹石は扁平な砂岩を使用している。

第1号土壤

土器 第19図（5）は、覆土より出土した大形の浅鉢形土器で上部を欠損するが、現存高20cm、径44cmを計る。器面には沈線が引かれ、縄文が施されている。器厚は1.2cm～1.8cmと厚い。

石器（第29図） 打製石斧、綠泥岩製の磨石、棒状の石器が出土している。棒状の石器は先端部に火熱を受けた痕跡がみられる。他に黒曜石の剝片3片が、同じく覆土より出土している。第2号土壤からは、遺物は検出されなかった。

その他の出土遺物

土器 第19図(6)は、調査地区西端の6号住居址近くの地場下より出土した。粘土紐を貼り付けた隆帯の際に竹管押引文を施している。八ヶ岳山麓から諏訪地方にかけて多く出土するもので曾利I式土器である。伊那地方では、町谷遺跡の他、駒ヶ根市大城林遺跡¹⁰でこれに近似する土器が出土している。拓影第24図(20~24)は、厚さ3~4mmの薄手指圧痕文土器で茶褐色を呈する。伊那谷の早期末~前期初頭の研究の上で注目されているものである。¹¹(20、21)は小さな波状をなす複合口縁で、また(22)は細い隆帯上に刻み目が施されている。内側に炭化物が付着している破片もみられる。(25~27)は半削竹管による施文がなされ、長石・石英を胎土に含み器厚8mm前後の脆い感じのする土器である。謂わゆる中期初頭の一形式をなすものと思われる。(28~39)は中期末葉~後期初頭の時期のものである。

石器(第30図) 遺構外の地場下から検出されたものが大部分である。打製石斧、横刃形石器が多い。(11)は石匙でも大型の部類に属する。硬砂岩製。(24)は花崗岩製の凹石で一面は研磨されている。(25)は緑泥岩製の磨石である。(32~34)は黒曜石製の剥片石器である。

以上その他に、各住居址及び柱穴・遺構外から多数の黒曜石の剥片が出土している。

第2節 弥生時代の遺物

弥生1号住居址

土器(第27図) 出土量は少なく、図示した(1~6)以外は全て細片であった。(1、2)はP₆より出土した變形土器で(1)は器面に細い条線が施されており、(2)は極めて弱い横披波状文を横走させ、その下に強弱のある斜行単線文を施したものである。(3)はP₅に近い北東のコーナー床面より出土した變形土器の胸部破片である。(4~6)は底部破片で、(4)は住居址の南コーナー付近の床面から、他は覆土より出土した。僅かに上げ底となるもの(4、5)がある。何れも弥生時代後期のものである。

石器(第30図) 1点床面から出土(26)したのみである。硬砂岩の一端を扁平に打ち欠き、若干刃をつけただけのもので、打製石庖丁の一種であろうか。

弥生2号住居址

土器(第27図) 弥生1号住居址同様出土量は少なかった。(7~9)は變形土器の上半

第Ⅳ章 遺物

部で、(7、8)は頸部に櫛描波状文を横走させている。(10、11)は底部破片である。5点とも床面からの出土であるが、(9)は住居址南西隅より、(7、8、10)は炉址付近より出土した。何れも弥生時代後期の土器である。

尚、本址からは石器は全く出土しなかった。

(赤羽、伊藤)

(註)

1. 駒ヶ根市教育委員会「駒ヶ根市県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書(太田切地区)」昭和49年
2. (1) 同じ
3. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書飯島地区その1」昭和47年
4. (3) 同じ
5. 上伊那誌編纂会「上伊那誌歴史篇」昭和40年
6. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書飯島地区その3」昭和48年
7. (1) 同じ
8. 松川町教育委員会「的場一国道153号改良工事松川町古町地区緊急発掘調査報告書」昭和48年
9. 河出書房新社「日本の考古学II 繩文時代」昭和45年
- 各務原市教育委員会「炉畠遺跡」昭和48年
- 蟹田高校考古学班「長野県考古学会誌16、蟹田市竜丘樹林前ノ原遺跡調査報告」昭和48年
10. (9) 同じ
11. 藤森栄一「繩文式土器」昭和44年
12. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書南箕輪村その1、その2」昭和48年
13. 東京都平尾遺跡調査会「平尾遺跡調査報告1」昭和46年
堀越正行「加曾利EIII式土器研究史(1~3)」信濃24巻2~4号 昭和47年
14. (3) 同じ
15. 千葉都市公社「松戸市金持台遺跡」昭和49年
16. (1) 同じ
17. 宮田村教育委員会「中越遺跡 第1次、第2次」昭和43年~44年
(5) 同じ
(12) 同じ
豊丘村教育委員会「田村原遺跡」昭和49年
伊藤 修 「高尾第2遺跡」伊那路 17巻1号 昭和48年

第V章 町谷遺跡学習会

今回の調査で縄文時代の住居址が8軒、柱穴址2箇所、土壙2箇所、弥生時代の住居址2軒が検出された。また出土遺物も多く、出土例の少ない蜂の巣石や吊手土器の吊手部分なども検出された。報告書作製の為、これらの遺物を整理したり遺構のトレースをする間に、いくつかの問題点が生まれてきた。それらの問題点について、調査団の中で暇をみては話し合ってみた。町谷遺跡という一遺跡の中での問題でなく、他の遺跡との関係の中で考えなければならないことは言うまでもないが、当遺跡のありのままの状態を観察し、その中から問題点を考えてみるのも一つの方法であると思う。先学諸氏の御批判、御教示を賜りたい。

——炉址について——

今回の調査で8軒の縄文時代中期の住居址が検出された。これらの住居址の炉の形態についてみると、大きく三種類に分けられる。

I類（第2号住居址）

第2号住居址のはば中央に、いわゆる平出III A式の土器を埋設した埋甕炉である。床面からは井戸尻期の土器が出土している。

II類（第1号・3号・6号・8号(?!)住居址）

第1号住居址は、大形の自然石6個と小形の自然石3個を用い65×70cmの方形石囲炉としている。第3号住居址は、第1号住居址同様、大形の自然石6個と小形の自然石3個を用いて95×70cmの長方形の石囲炉としている。両方とも炉の掘り方は深さ10cmにも満たない。両住居址の床面からは、曾利II式期の土器が出土している。第6号住居址の石囲炉は、最も堅っており恐らく5個の自然石で固っていたと思われるが、一部欠けている。ピットの深さは10cm前後と浅く、床面より曾利II式期の土器が出土した。第8号住居址は、東寄りに0.9×1.2mの楕円形を呈する極めて浅い掘り込みのある炉址で、3個の自然石と小さなピットを伴っている。このピットは、石囲炉の石を抜き取った跡とも考えられる。曾利II式期の土器が出土している。

III類（第4号・5号・7号住居址）

第4号・5号住居址の炉は大形の掘り込みであり、壁に多数の自然石を配する。第4号住居址の炉は、1.8×1.6m、深さ50cmと、炉としては大形である。自然石はがの東壁に配され

ている。第5号住居址の炉は中央やや北西寄りにあり、 $1.3 \times 1.2\text{m}$ 、深さ40cmを計る。炉の壁を若干掘り込んで自然石の下半部を埋め込んでいる。曾利II～III式期の土器が出土している。第7号住居址の炉は、中央やや北西寄りにあり $1 \times 1\text{m}$ 、深さ30cmを計る。壁に段を持ち自然石を抜いたと考えられる。

以上、3種類に分類してみたが、過去において炉の形態に時期的な変化のあることが指述されている。町谷遺跡の8軒の住居址をみると、埋甕炉（井戸尻期）、石囲炉（曾利II式）大形配石炉（曾利II～III式）の順に新しくなると思われる。しかし第2号住居址の埋甕炉を除いて、他の7軒の住居址は時期的に極めて接近しており、石囲炉から大形配石炉への変化についてはまだ問題が残されている。例えば、第4号・5号住居址には埋甕施設があり、遺物の出土量も多いことから集落に於ける特殊な性格を持つ住居址という事も考えられる。

柱穴址について

調査地区西端に検出された第1号・2号柱穴址とそれに隣接する第4号・5号住居址について触れてみたい。これらの遺構から出土した遺物についてまとめてみると次表のようになる。

遺構	時期	埋甕	土製品	石器	種
第4号住居址	曾利II～III式	有	吊手、土偶	石棒片、石皿片	多數
第1号柱穴址	中期末葉 (後期初頭)	無	吊手、土製円板 異形土製品	石皿片(凹石)、蜂の巣石	多數
第2号柱穴址	中期末葉 (後期初頭)	無	吊手	凹石、打石斧、磨石斧	多數
第5号住居址	曾利II～III式	有		打石斧、磨石斧、横刃形石器	

第1表 第4号・5号住居址、柱穴址出土遺物

これら4遺構は、柱穴址を挟んで両側に第4号・5号住居址が位置する形となっている。第1号柱穴址は、12個のビットが橢円形に並び、その北側には不定形の土壙と不規則なビットを持つ第2号柱穴址が隣接している。このことから第1号・2号柱穴址は連結した一つの遺構ではなかったかとも考えられる。県内では類例は少ないが、関東地方において後期前半に入口に張り出し部や多数のビットを設けた住居址がみられる。しかし出土遺物の時期、種類に多少差があること、焼土、床面などが認められないことなどから別の遺構と考えた方が良いように思われる。

では、第1号・2号柱穴はどの様な性格の遺構であったか。第1表にみられる様にここか

らは吊手土器の吊手部分、土製円板、異形土製品、J:偶（4住覆土）、蜂の巣石、凹石、石棒（4住覆土）等、非実用的遺物や、火に関係ある遺物が多数出土している。また前述したように床面、炉址などが認められることから考えて、住居址とは異なる全く別の遺構ではなかっただろうか。それは集落における祭祀的な場所であったかもしれない。飯島町山溝遺跡、尾越遺跡、駒ヶ根市塩木遺跡などにもこの様な例はみられるが、さらに今後の研究によらねばならない。

次に柱穴址と住居址の時期的な問題がある。第1号・2号柱穴址からは中期終末より後期初頭の土器が出土しているのに対し、第4号・5号住居址からは曾利II～III式の土器が出土している。さらに第1号・2号柱穴址から出土した遺物と同種類のものが第4号住居址の覆土内にみられる。このことは第4号住居址の廃絶後、第1号・2号柱穴址の遺物が何等かの形で入ったのではないかと考えられる。そう考えると柱穴址と住居址の間には時間的な差が認められるが、この問題も限られた時間での調査であり、また付近一帯は開田により相当破壊されていることなどから考えて、今後この種の類例を待ち研究しなければならない問題である。

——石器について——

第2・3表より町谷遺跡の石器について次の様なことが考えられる。

各住居址とも打製石斧・磨製石斧・横刃形石器を主体とし、それに石匙、石鏟、凹石等が少量伴っている。また第2号・6号住居址を除いて床面からの出土数が少なく、第4号・5号住居址は、床面から一点も石器が出土せず、覆土に限られていた。このことから住居址の廃絶時に持ち去ったか、或いは別に住居址外に石器の置き場所が存在したこととも考えられる。

第1号・2号柱穴址からは、蜂の巣石、凹石、石皿（裏面は凹石）といった石器が出土しており、柱穴址の性格は石器組成の上からも住居址とは異なっていたと思われる。

第1号土壤からは打製石斧1点、磨石1点、火熱の跡のある細長い自然石1点、それに黒耀石剥片3点が出土しているが、いずれも覆土よりの出土であり、土壤に直接関係あるものは明らかでない。

材質の点から町谷遺跡の場合、次の3分類が可能と思われる。

I群 打製石斧、磨製石斧、横刃形石器、石匙、石鏟により構成される一群で、硬砂岩が最も多く、次いで緑泥岩、粘板岩、安山岩等を用いている。破損度は打製石斧、磨製石斧が高く、横刃形石器、石匙は低い。恐らく機能上からくる衝撃力の大小によるものであろう。打

第V章 町谷遺跡学習会

第2表 遺構別出土石器数量 () 内は破損個体数、内数

遺構	時期	層位	打製石片	磨製石片	磨刀形器	石點	石錐	丸棒状器	磨石	石頭	凹石	錐の巣石	石壙	石錐	その他	合計
2住	井戸尻	覆土	4(2)				1						2	1		8(2)
		床面	6(4)		4											11(5)
1住	曾利	覆土	3(1)	1(1)												4(2)
		床面	1	1												2
3住	〃	覆土		1(1)	1	1										3(1)
		床面			2											2
6住	〃	覆土	1(1)													1(1)
		床面	1	2(1)	7(1)			1								11(2)
8住	〃	覆土										1		1(1)		7(3)
		床面	2	1(1)	1	1(1)										2(2)
4住	〃	覆土	3(3)	1(1)	5	1(1)				1(1)						12(7)
		床面														
5住	〃	覆土	3(2)	1(1)	3(2)										1(1)	9(8)
		床面														
7住	〃	覆土	1(1)	1(1)	2											3(1)
		床面	1							1					2(1)	4(1)
2柱	中・木造-後-初	7(3)	1(1)								1					2
1柱	〃								1(1)	1(1)	2					3(1)
土1	曾利	1							1							1
その他 遺構外		17(9)	2(2)	11	3				4		1					38(1)
合	計	5026	1398	36(3)	6(2)	1	1	5	2(2)	5(1)	2	3(1)	1	11(3)		13689

第3表 材質別出土石器数量 () 内は破損個体数、内数

岩石名	打製石片	磨製石片	磨刀形器	石點	石錐	丸棒状器	磨石	石頭	凹石	錐の巣石	石壙	石錐	その他	合計	
硬砂岩	3708		34(3)	4(1)	1								4		8022
緑泥岩	6(4)	10(8)	2(2)	2(1)			3						3(1)		2600
粘板岩	3												1		4
安山岩	1(1)	3(3)											1(1)		5(5)
砂岩						1	1		2						4
花崗岩							1	2(2)	3(1)	2					7(2)
黒曜石											3(1)				3(1)
チャート												1			1
その他	3(2)		1										2(1)		6(3)
合	計	5026	1398	36(3)	6(2)	1	1	5	2(2)	5(1)	2	3(1)	1	11(3)	13689

注) 石頭→凹石のように、個体が2機能を有するものがあるため、第2表・第3表とも合計が一致していないものがある。

第V章 町谷遺跡学習会

製石斧は脳部或いは基部の破損が多い。横刃形石器で硬砂岩が多いのは、打製石斧製作の際、剥片を利用したためと思われる。

II群 乳棒状石器、磨石、石皿、凹石、蜂の巣石のグループで花崗岩、砂岩を中心とし一部磨石に緑泥岩がみられる。石皿を除いて破損していない。

III群 石錐、石錐は黒曜石、チャートを使用する。鋭利さを何よりも求めたことは云うまでもない。

以上、I~III群の様に町谷遺跡では石器の機能に応じて石材を選択している。なお黒曜石の剥片は比較的第2号・4号・5号住居址より多かった。全体では124片であり数量を明確に把握することは困難であり、むやみに数量化すると混乱の恐れもある為、表には載せなかった。

今後、この種の統計は剥片や土器の出土状態も合わせて考える必要があると思う。

——飯島の弥生時代について——

今回の調査で弥生時代後期の住居址が2軒検出された。飯島町では、かつて昭和37年に高尾遺跡で弥生時代の住居址が1軒調査されているが^[1]、今回の2軒を含めても3軒と少ない。今回の調査により飯島地区に於ける弥生時代後期研究の手掛かりができたと思われる。

伊那谷の弥生時代の遺跡の分布からみて、飯島地区はその分布が希薄である。これは当地区の地形に大きな原因があると思われる。弥生時代初めの遺跡は、山麓の溢潤地に多くみられるが^[2]、稻作が行なわれるようになり遺跡は天竜川の氾濫原を臨む段丘上に立地するようになった。ところが飯島地区では段丘が天竜川右岸にまで迫り、左岸には伊那山地の山麓が続いている、天竜川は深い渓谷となり南流している。この様な地形の為に、当時の生活の場を山麓の台地へと選ばなければならなかったと思われる。

飯島町の弥生時代の遺跡は、極めて少ない。日曾利、高尾、岩間、本郷など数箇所で遺跡が確認されているだけである。縄文晩期終末の遺跡として高尾第2遺跡、うどん坂II遺跡^[3]があげられる。両遺跡とも山麓の沢あるいは湿地を臨む台地上に位置しており、東海地方の影響を強く受けている遺跡である。弥生時代中期の遺跡は確認されておらず、後期になり当遺跡、高尾遺跡、日曾利遺跡などで僅かにみられる。また古墳時代になつても遺跡は少なく、七久保、高遠原の山間部の台地、本郷の段丘上に僅かにみられるだけである。

上伊那地区においては、最近中央道、県営圃場整備事業がさかんに行なわれ、それにより弥生時代の遺跡が次々と発見され、当時の生活についても次第に明らかになりつつある。例

第V章 町谷遺跡学習会

えは、辰野町樋口五反田遺跡からは炭化米が検出され、また下伊那郡高森町出早神社付近遺跡からは多くの石器が出土している。これらの遺跡は、いずれも十数軒で集落を形成しており、土器についてみても貯蔵用の壺、煮沸用の甕、祭祀用の高杯などと種類が豊富である。

これに対して当遺跡の場合、住居址は2軒であり、石器は、2軒の住居址を合わせて石庭丁が1点だけである。土器についても甕の破片が大部分である。樋口五反田遺跡や出早神社付近遺跡などに比べてあまりにも貧弱である。弥生文化を持った人々の生活の場として、飯島地区の地形は適さなかったのだろうか。

この問題については、今後上伊那、飯島地区の弥生時代の資料を待ち考えてみたい。

(註)

1. 上伊那誌編纂会「上伊那誌歴史篇」昭和40年
2. (1) 同じ
3. 伊藤 修 「高尾第2遺跡」伊那路17巻1号 昭和48年
4. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書飯島地区その3」昭和48年
5. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書辰野地区その1」昭和48年
6. 長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書高森地内その1」昭和47年

第VI章 所 見

昭和49年12月、南駒ヶ岳より吹き降ろす寒風にさらされながら2日より14日まで発掘を行なった。その結果、縄文時代中期の住居址8軒、弥生時代後期の住居址2軒、柱穴址2箇所、土壤2箇所の調査を行なうことができた。これらの調査より得た問題点の2~3について述べ、まとめとしたい。

本遺跡は、山の神沢に源を発する沢によって形成された、東西に細長い段丘上に点々と分布する遺跡の1つである。遺跡は50年前には畠地であったが、その後水田に造成され、遺跡の大部分は破壊されたものと思われる。今回の調査は、破壊から免れた箇所の調査であったので、縄文式及び弥生式時代の集落の片鱗の復原に止まってしまったのであるが、各種の好資料が認められそれらの持つ意義は、今回の調査を成功させた原動力となったのである。

1) 縄文式時代の遺構。本遺跡検出の住居址は特定のものではなく一般的なものであるが、学習会でも取り上げているように埋甕炉をもつ第2号住居址を除いて、第1・3・6・8号住居址は大小の自然石を混ぜて割合浅く掘り込んで作った炉址を有するもので、その時期は曾利II式に比定される。第4・5・7号住居址の炉址は大形で、深く掘り込み壁に石を配した形式の炉址で、第1・3・6・8号住居址の石門炉とは異なる構造をもっているものであり、また遺物の上でも曾利II~III式期のものである点、新しい時期の変遷として考慮を要するものと思われる。

2) 柱穴址。第4号・5号住居址との間に所在する遺構である。この遺構は出土遺物等よりして若干注目すべき遺構と思われる。第1号柱穴址は、長径4~4.5mの東西に長い柱穴址である。柱間の間隔は1~2.2mで横円形をなし、柱の深さも他の住居址より深い。遺物も土製円板、異形土製品、蜂の巣石、凹石等非実用的遺物が多く出土している点や、平地掘っ立て建物的構造を有しているところより、集落の協同作業場かあるいは祭祀的な場所と考えてみたくなる遺構である。類例も少ないので今後の研究に待ちたい。また近接する第4号・5号住居址との間に時間的な差が窺われるが、ここでは集落全体としての立場で考慮してみた。

3) 飯島の弥生式遺跡について。伊藤修調査主任が言っているように、今迄飯島地区の弥生式遺跡の発見は数の上ではそお多い方ではないが、上伊那地方全体としても弥生式遺跡調査はあまり進んでいない現状である。このことは上伊那郡の遺跡所在の地形的研究が確立されていないことにも原因があると思う。幸い、近年中央道理蔵文化財包蔵地の発掘が行われ、

第Ⅱ章 所 見

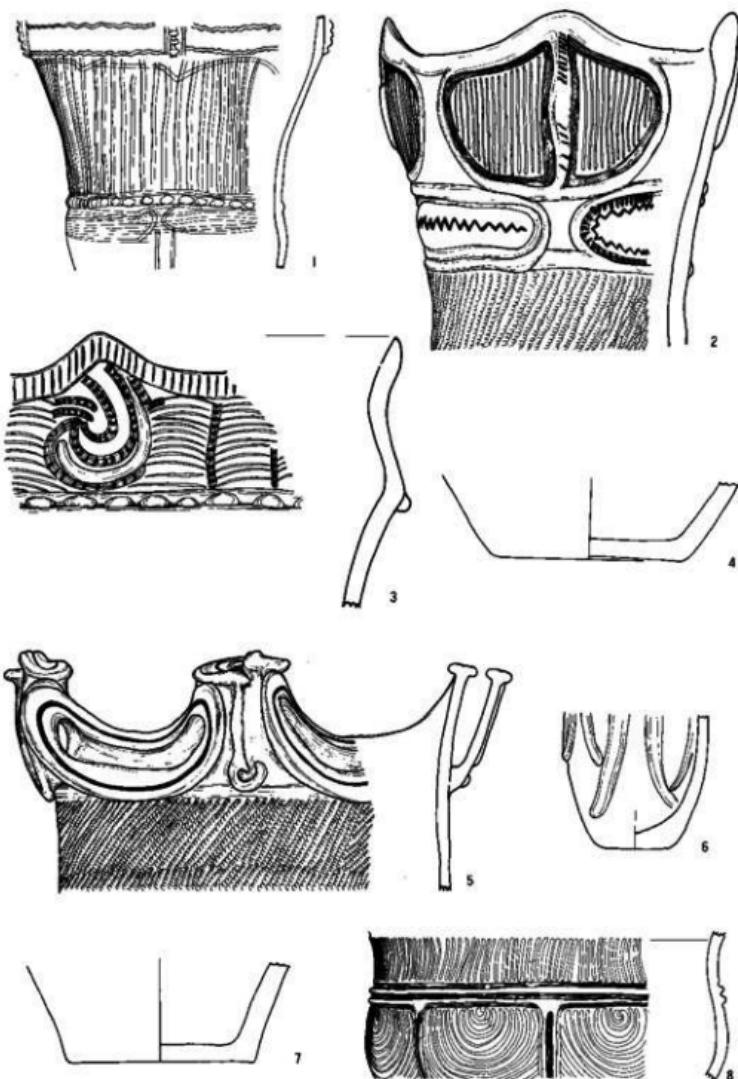
伊那盆地を南北に縱断した形となり、考古学上あらゆる面での問題を提起してくれた。また、県営圃場整備事業、住宅団地等公営の事業が行われ、それにかかる遺跡の発掘がなされ、今迄開発が行われなかった包蔵地とか、古い水田地帯など我々の想像もしなかった遺跡が近代的な機械力の力によって行われ、予期した結果や、思いもかけない結果がでてきた。これ等の開発がもたらした成果は、ある意味では埋蔵文化財の破壊でもあったが、考古学の上にはいささかの明しをもたらしてくれた。これ等の結果、天竜川の氾濫原を取り巻く地域には遺跡が分布することは古くより考えられていたのであるが、圃場整備事業にあっては、村落の新旧の水田地帯を片端から改良して行くので、我々が考えていた場所にある比率をもって発見されるまでにいたった。この事実は、我々が今後開発が行われる箇所は勿論であるが、開発が行われない場所についてもある程度の推測が可能になったことを意味している。こうした経験は、今後遺物のほとんど散布を見ない弥生式及び弥生式以降の遺跡の発見に役立つものと考えられるので、飯島地区をはじめとする地域の微地形的な面を研究することによって、ある程度の遺跡地を知ることができると信じている。

石器についても、種々の角度から考えてみたので皆様の御批判を頂きたい。

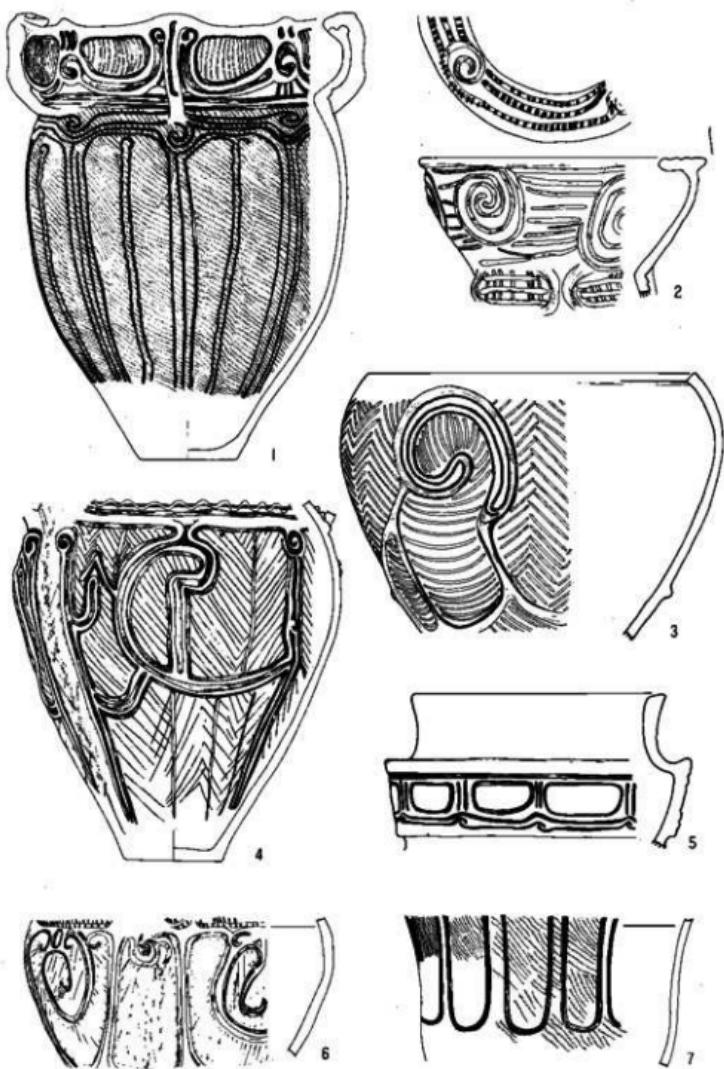
発掘中や遺物の整理中、調査団の方々によって気が付いた種々の問題点について学習会を行なった。その記録を本文末尾に掲げたので合わせて御批判を頂きたい。

終わりにあたり、地元、飯島町、飯島町教育委員会、南信土地改良事務所等の熱意ある応援に感謝の意を捧げます。

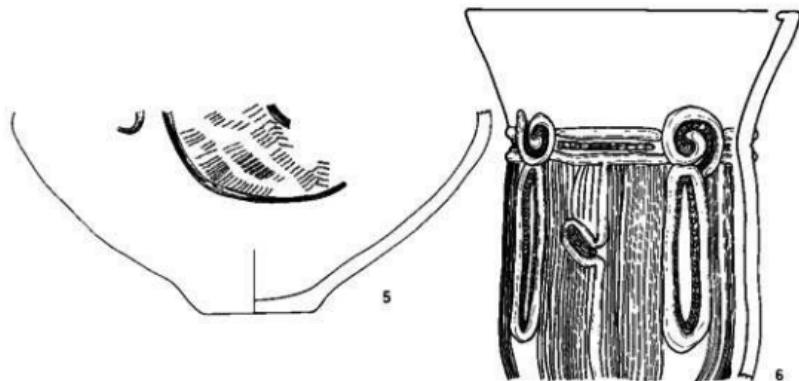
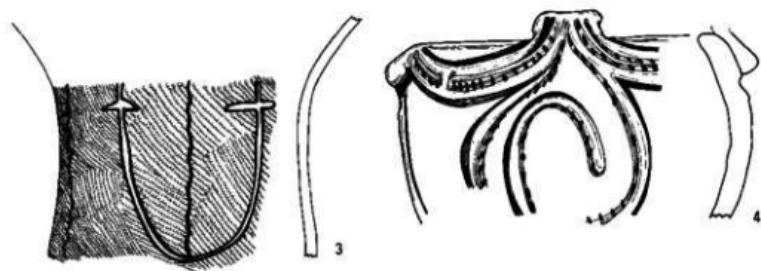
(調査団長 友野良一)



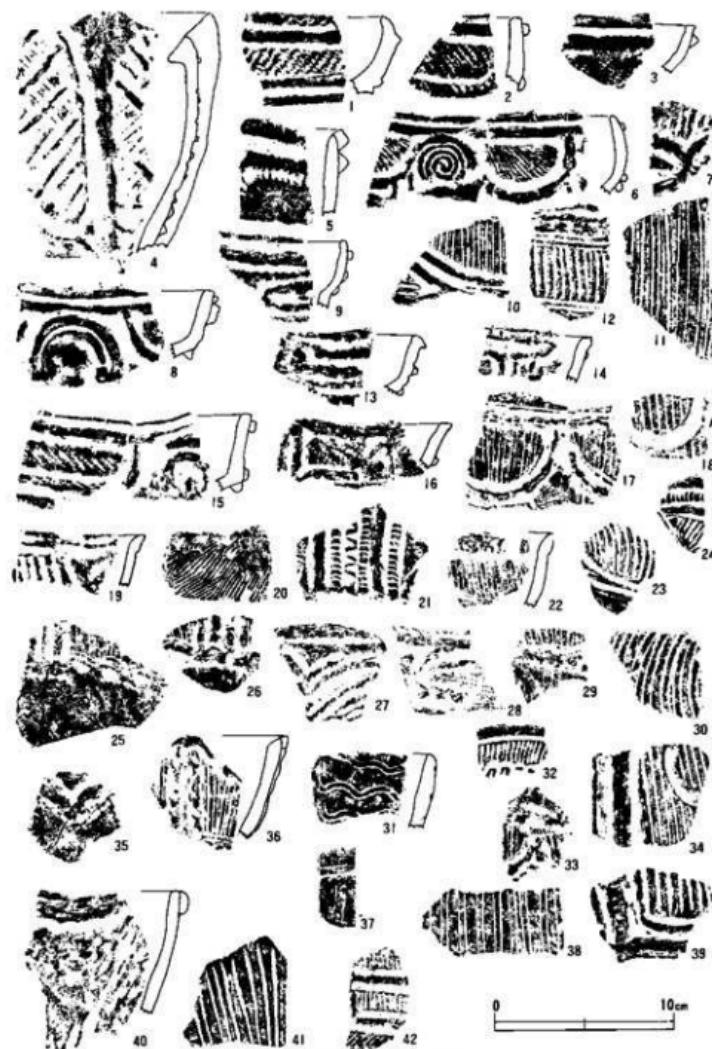
第17図 穂文式土器 (1・8 1:6、2・3・4・5 1:4、6・7 1:3)



第18図 純文式土器 (1・4・6・7 1:6、2・3・5 1:4)

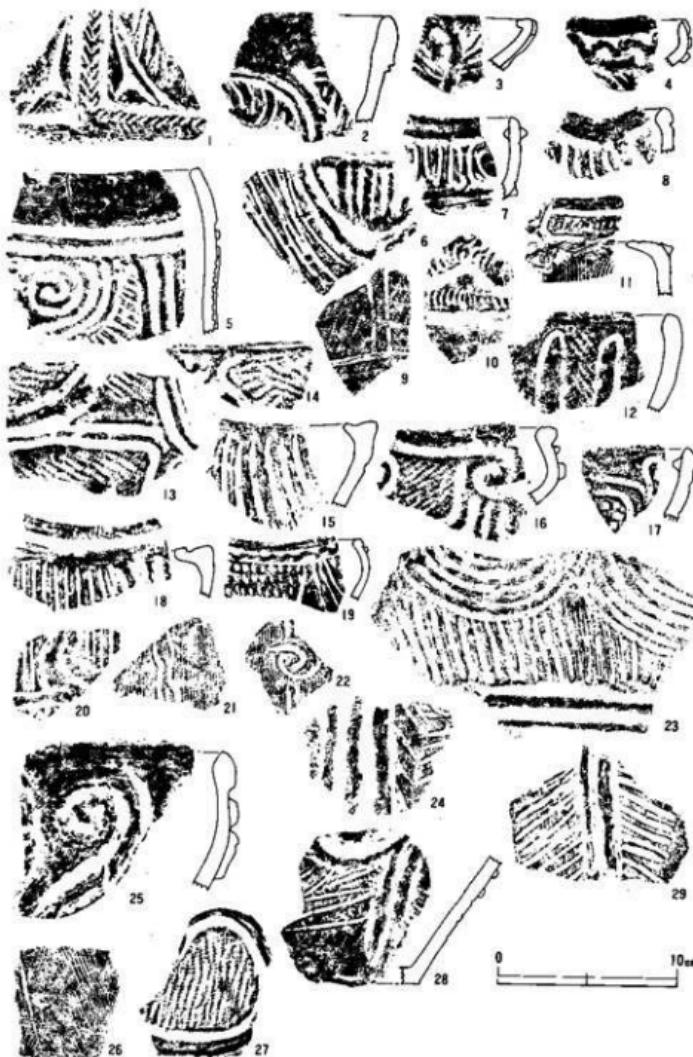


第19図 條文式土器 (1・2・4・6 1:4、3・5 1:6)

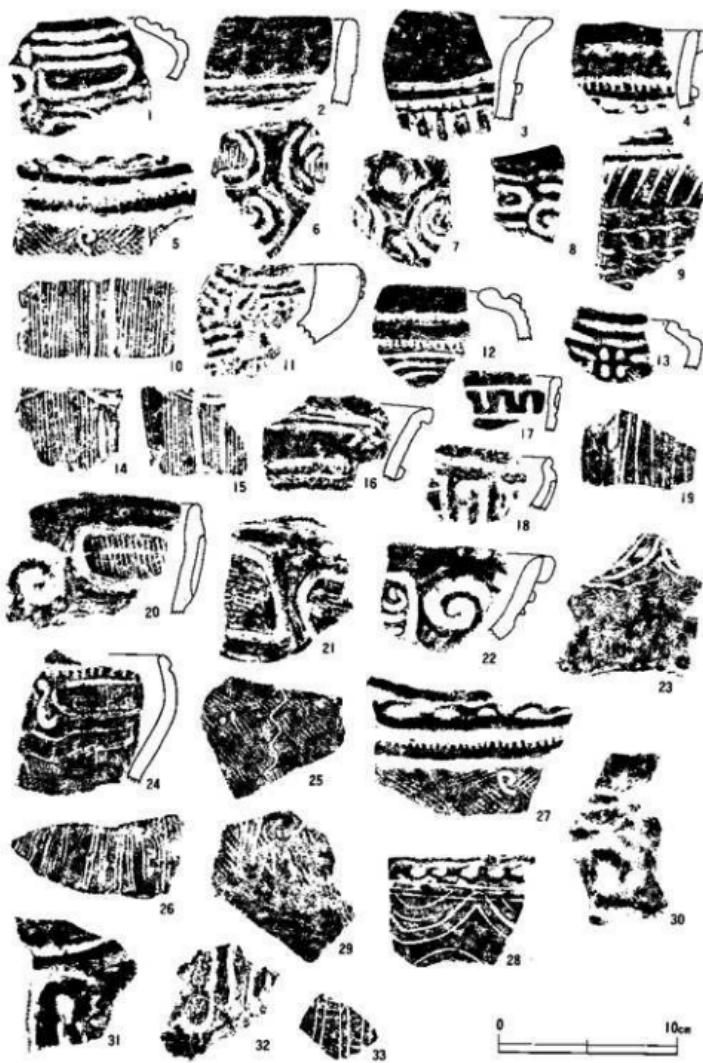


第20図 繩文式土器 (1 : 3)

1~11 1 住覆土、12~16 1 住床面、17~30 2 住覆土、31~38 2 住床面、39~42 3 住覆土



第21図 純文式土器 (1 : 3) 1~14 4住覆土、15~24 4住床面、25~29 4住址

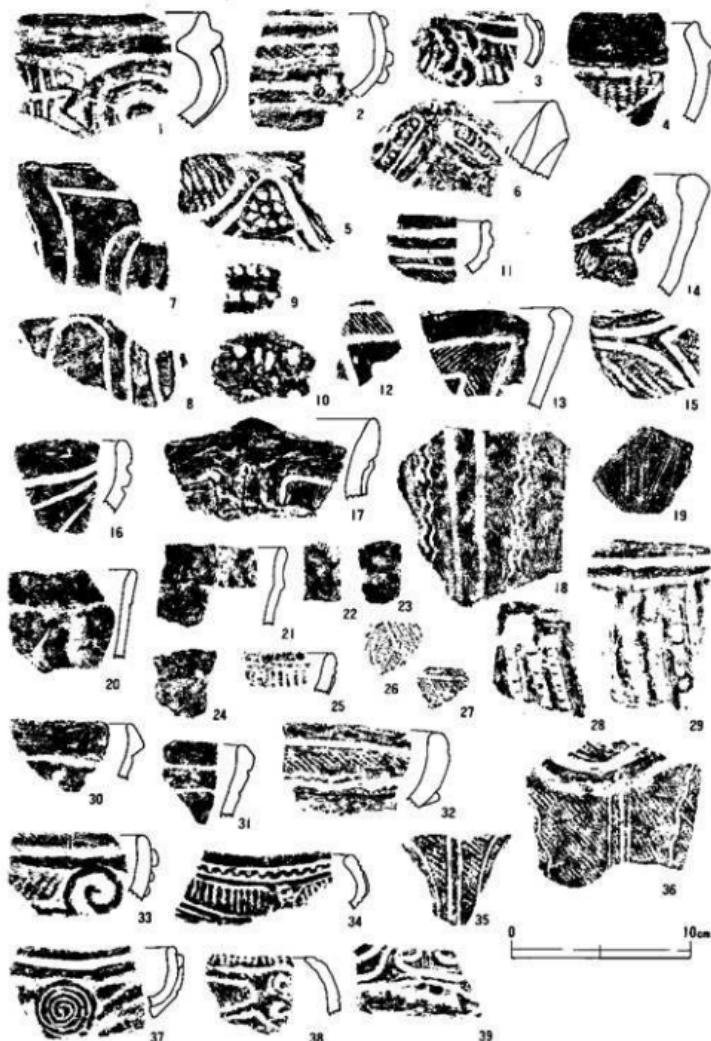


第22図 楠式土器 (1:3)

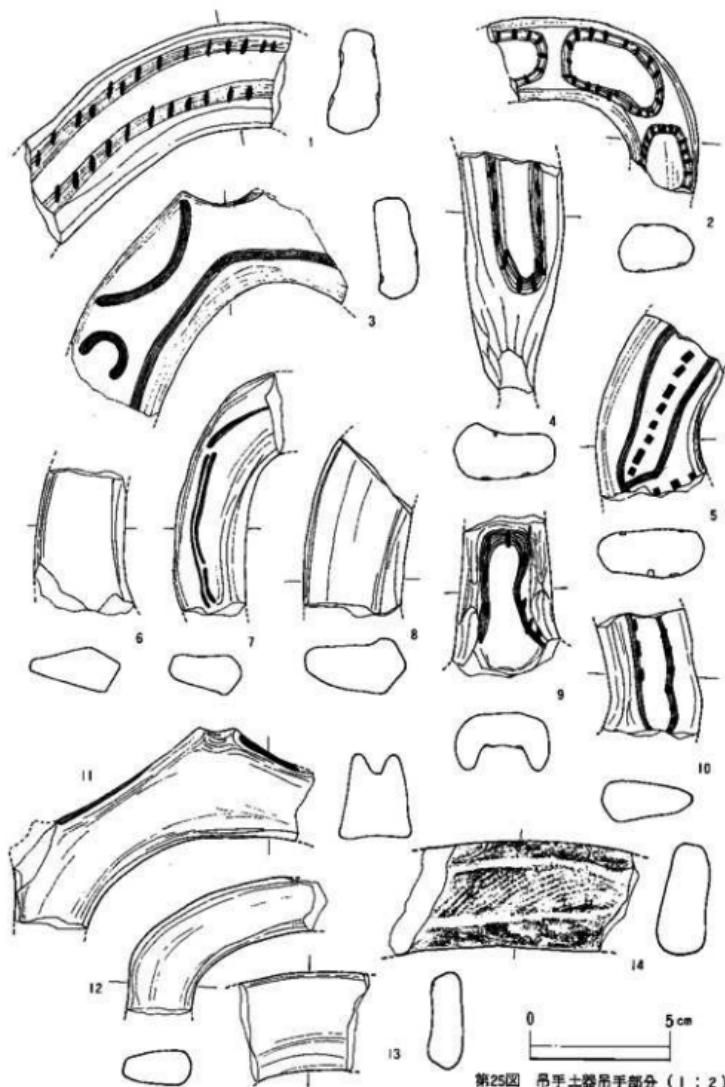
1~12 5住覆土、13~18 5住床面、19~21 6住覆土、22~28 7住覆土、29~33 7住床面



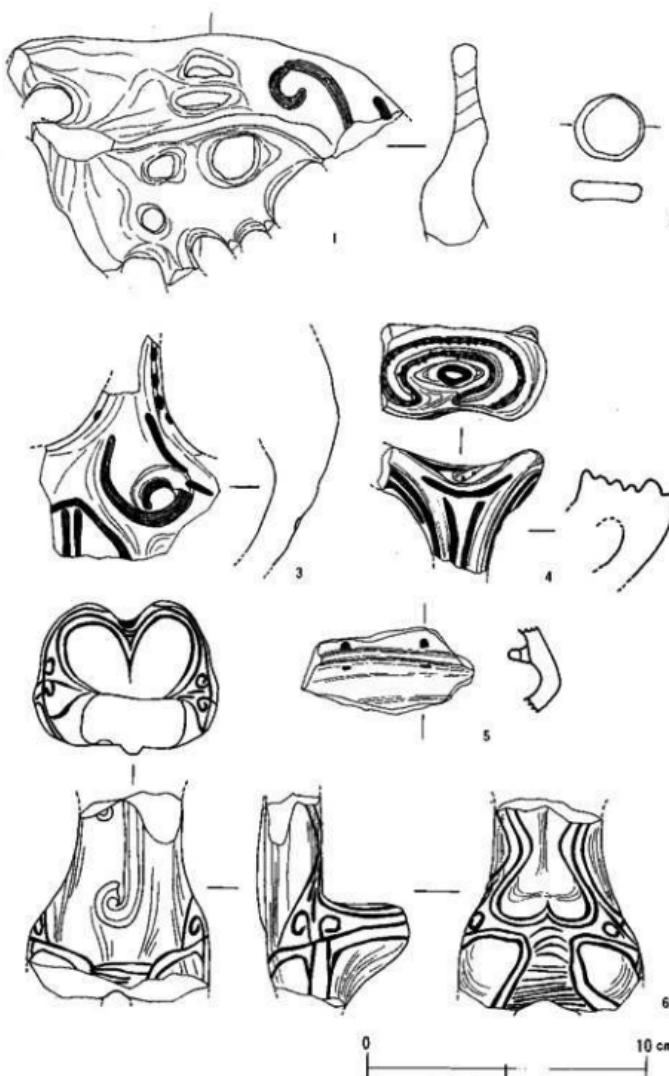
第23図 補文式土器 (1 : 3) 1~4 8住覆土、5~33 1号柱穴



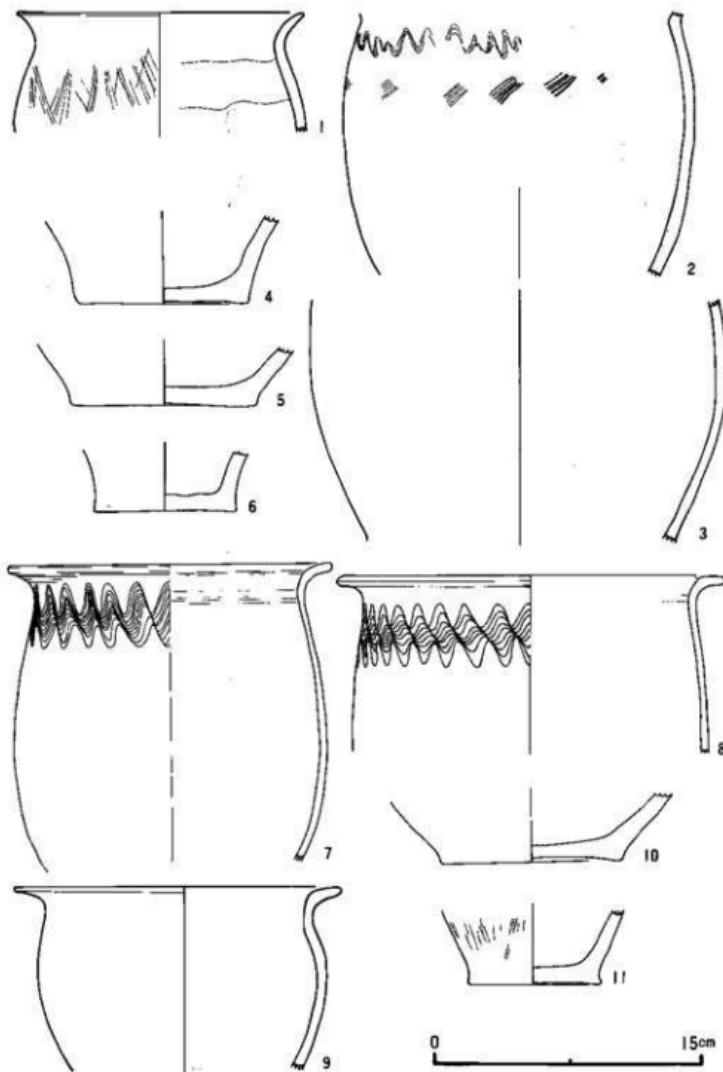
第24図 純文式土器 (1 : 3) 1~19 2号柱穴、20~39 その他



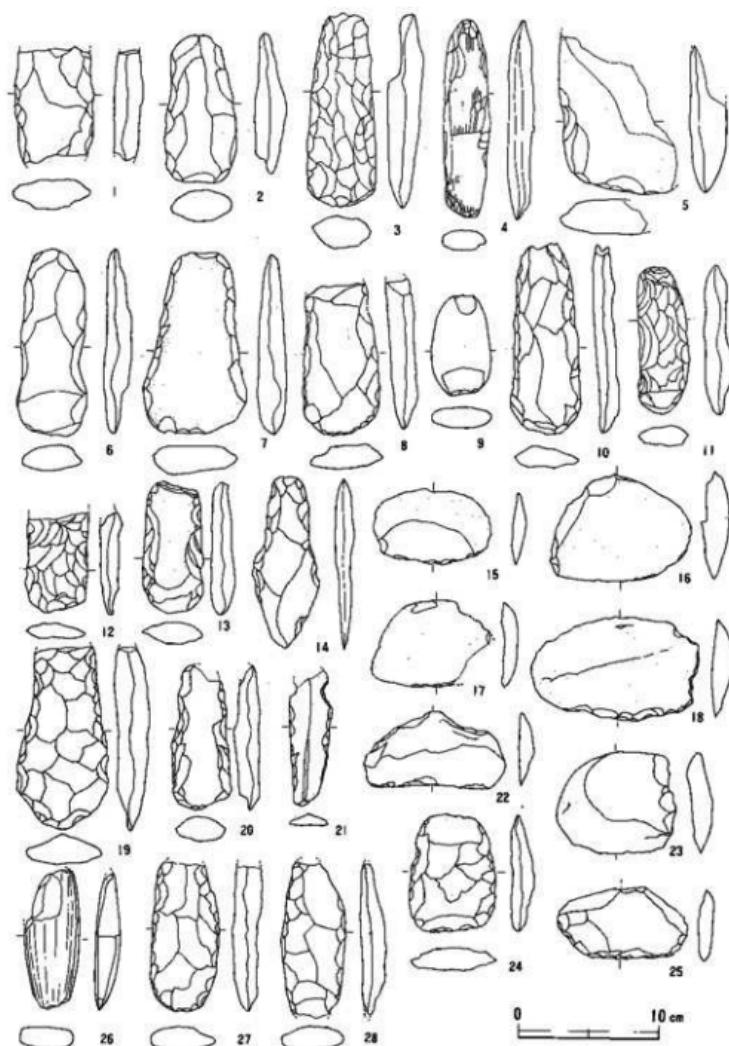
第25図 吊手土器吊手部分 (1:2)
1~5 1号柱穴、6~9 2号柱穴、10 7住覆土、11~14 4住覆土



第26圖 繩文式土器、土製品 (1:2) 1~4 1号柱穴、5~6 住匱土、6~4 住匱土

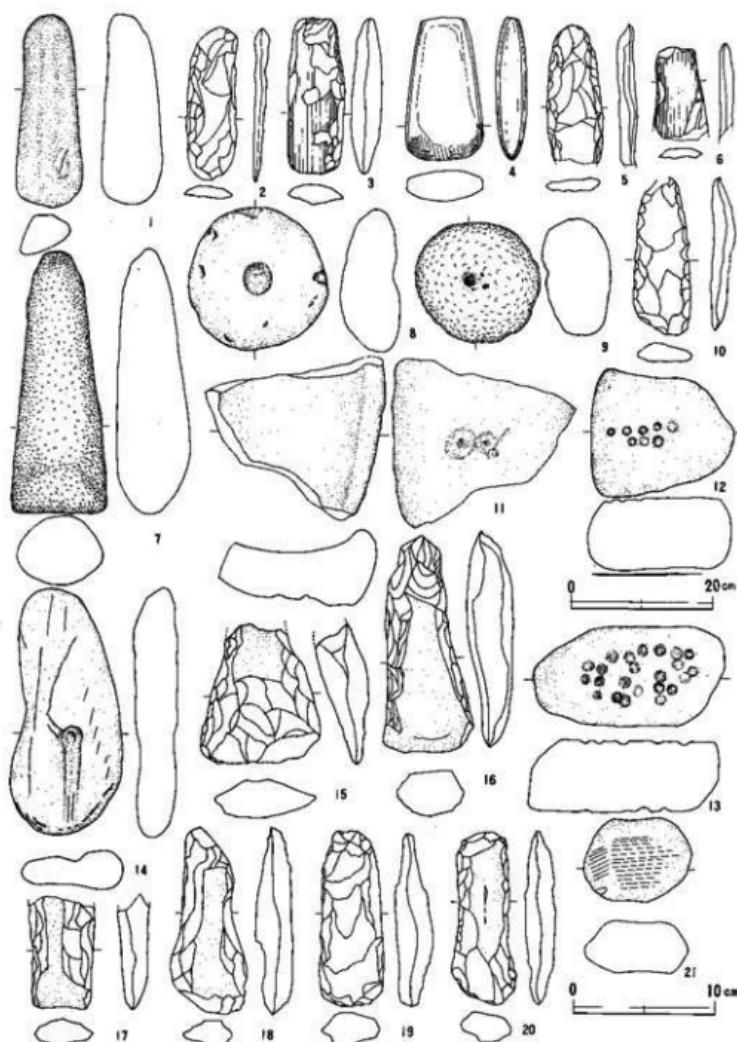


第27図 弥生式土器 (1 : 3) 1~6 弥生1号住、7~11 弥生2号住



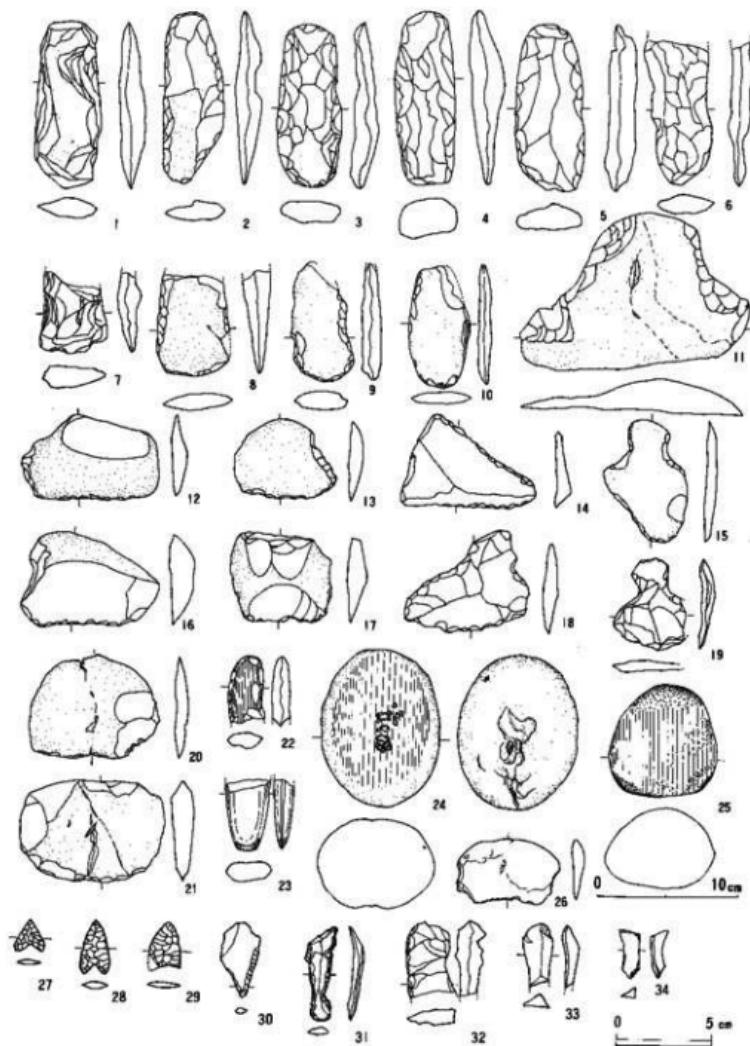
第28図 縄文時代の石器 (1 : 4)

1~3 1住覆土、4~5 1住床面、6~9 2住覆土、10~13 2住床面、14~15 3住覆土、16~17
3住床面、18~24 4住覆土、25~28 5住覆土



第29図 純文時代の石器（1：4、12・13のみ1：8）

1～4 6住床面、5～6 7住覆土、7～8 7住床面、9～10 8住床面、11～13 1号柱穴、14～19
2号柱穴、20～21 1号土壤



第30図 繩文時代・弥生時代の石器 (1-26 1:4、27-34 1:3) (弥生時代は26のみ)
1-25, 32-34 その他出土、27-28-30 2住覆土、29 8住床面、31 7住床面、26 弥生1住床面



遺跡遠景(東より)



遺跡遠景(西より)



遺跡遠景(南西より)



町谷堤



東地区住居址群（北より）



西地区住居址群（北より）



第一号住居址（南西より）



第二号住居址（南より）



第3号住居址（南より）



第4号住居址（東より）



第5号住居址（西より）



第6号住居址（北より）



第7号住居址（北より）



第8号住居址（北より）



弥生 1号住居址（東より）



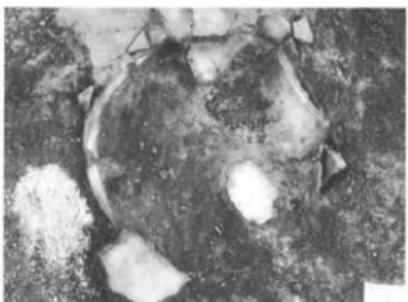
弥生 2号住居址（西より）



柱 穴 址 (東より)



記 念 摄 影



第2号住居址



第1号住居址



第3号住居址



第6号住居址



第4号住居址



第7号住居址



第2号住窑炉



第4号住埋甕



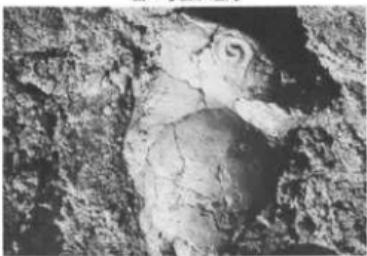
第5号住埋甕



第4号住炉址内



第7号住床面



第7号住覆土



柱穴址出土蜂の巣石



弥生2号住出土甕



第2号住



第2号住



第4号住



第4号住



第5号住



第7号住



1



2



3



4



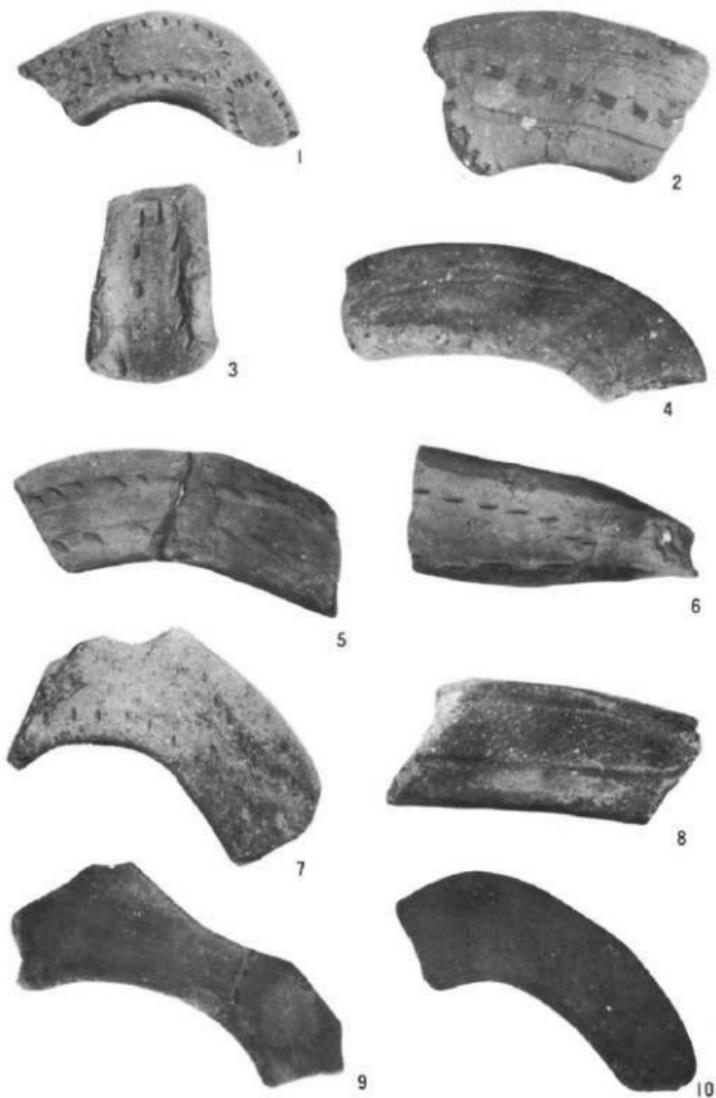
5



6

1 第2号柱穴址、2 その他、3・5 第1号柱穴址、4 第6号住、6 第4号住

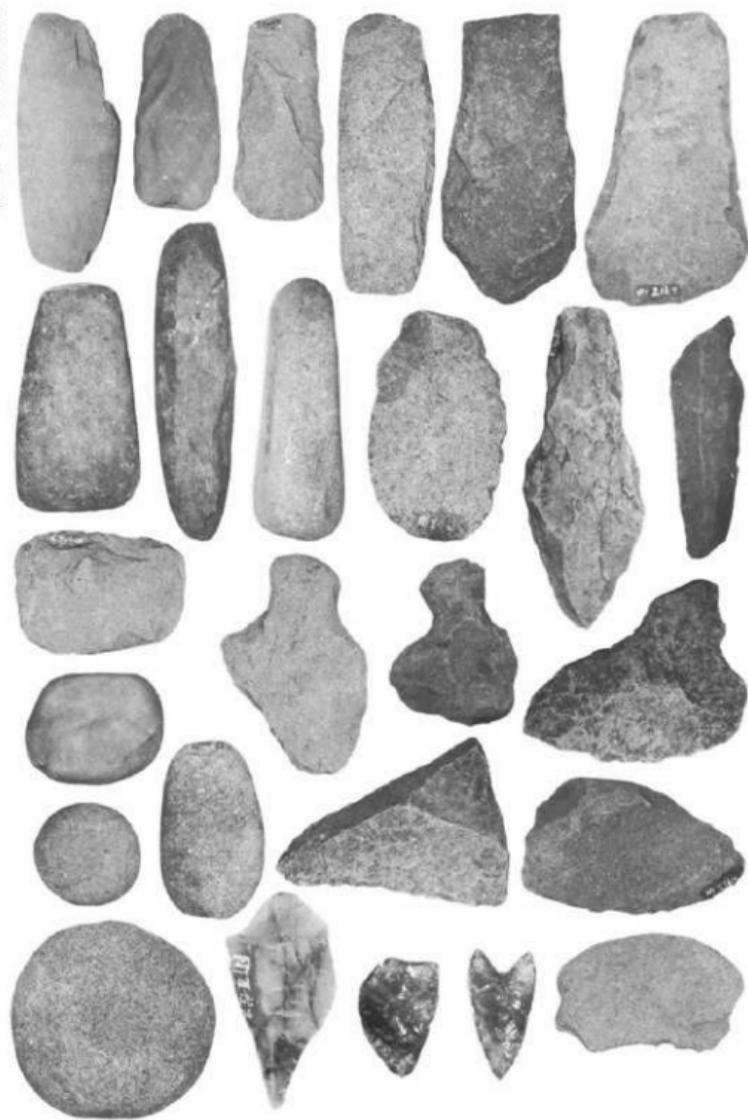
圖版第十四 吊手土器吊手部分







圖版第十七 出土石器



あとがき

町内も急速に進められている県営圃場整備事業に伴い、当町に於ける分布調査による遺跡が整備事業該当地区内に多く包含されている。緊急発掘された町谷遺跡もその例外でない。

関係筋の御指示に従い、発掘記録保存の要が認められ友野氏を团长とする調査団の方々の御尽力、地区の方々の御協力に依り初期の目的を果し得た事は幸である。

当遺跡よりは、縄文住居址及び土器等の外、広域に点在する当町内の遺跡発掘が逐次施行されつつある中で特に見られなかった弥生式住居址、土器が発見された事は考古学上特筆すべきことであった。

また、この発掘調査の結果を総密かつ周到な計画のもとに記録にまとめることは、これまた大変な作業であったが、これが後世に伝承され、当地方に於ける先住民族の日常生活を中心とした古代の姿、歴史的な経過をさぐり得る貴重な資料であることを思うと、精力的にも時間的にも限りある中で専心された担当者の努力を高く評価したい。

友野团长はじめ発掘に従事された各位、また集録、発刊に尽力された事務局員諸氏に改めて深甚なる敬意を表します。

昭和50年3月5日

飯島町教育長 織田正巳

町谷遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和50年3月10日 印刷

昭和50年3月15日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

印刷所 伊那市 小松総合印刷株式会社

